

(支那學(儒學史))

講師 内田周平 講述

孔子の教授

孔子より已前周の初めに當り既に儒と云ふ職ありて卿大夫の致仕したる者
教授を爲して居りしがその教ふる所は大抵六藝を主としたる者の如く或は
當時政府の定めたる教條に依りて全般人民の心得を演べしものなればその
方法も一定にして簡單なりしならん孔子の時に迄びては禮樂崩壞せしのみ
ならず異端の學も漸く出で來らんとするの兆ありて中庸の索隱行怪の語を
見ても知るべし(原壤の如きは已に老子流の行を見はすに至りたれば我が奉
ずる所の教を明言して其歸趣を示すの必要を認むるに至る是れ古來の道徳
論が孔子を待ちて大に詳密となりし所以なり蓋し唐虞以來、皋陶、伊尹、傅說、甘
盤の如き賢者ありて皆道徳政治の要義に通じたりしが各々その學術を政事
に施すを得たれば未だ著述と稱する程の者あらざりき想ふに學問の事即ち
讀書も窮理も往古より有りたるに相違なけれ共當時聖賢相ひ集まりて政事

を爲したれば別段の著作もなかりしならん周の春秋の時代に及ては名ある人にして學問せぬ者はなかりしが其中には學問せしも用ゐられざる者ありて之を政事に行ふを得ず是れに由りて獨り自ら下に居りて教授を業とし隨ひて學理を研き學說を立つるに至りしなり學術も事業に顯はすを得れば必ずしも著述するを須るずと雖も用ゐられざるときは學理を研究して之を後世に遺すに至るは自然の勢なり且つ時勢の變遷するに隨ひて事物も益々繁雜となれば亦必ず學理に據りて之を明めざるべからず孔子歷代聖賢の道を傳へ之を當世に行はんと欲せしかども卒に行はれず是に於て其門人と共に益々之を講明して遂に之を書に筆せり是れ春秋の季に當りて孔門の學が其標號を掲げ出したる所以なり爰に論語に據りて首に其教授の方を示し之に次ぐに其學術を以てせんと欲す但だ余のこゝに教授と題せしもの一は獨り學業を指すのみならず兼ねて行狀を指すと知るべし

周禮の司徒に師は徳行を以て民を教へ儒は六藝を以て民を教ふるとを言ふ孔子の道は師と儒とを兼ねたれば當時各國の學者來たり弟子と爲り其教を受けしと

知るべし今その教授の方を識らんと欲せば論語の書を捨て、他に求むべからず孔門の教は讀書を以て先となすとは論語の開卷學而時習の章を見て知るべし凡そ倫常の紀道德の要禮樂文藝の事載せて書冊に在るものは皆當に之を學習すべし然れと聖人の教は未だ行事に見はさずして但だ言語に見はす者あらず故に讀書と云ふと雖も必ずこれを己れが身に体認して實踐し徒らに記誦詞章の資となすものに非るなり蓋し學而の一章は孔子が學を以て人を誘ふの語にして而かも孔夫子一生の事實は此中に包括せられたり故に弟子論語を編するの時これを以て二十篇の首に冠せしなり二十篇の終りに不知命無以爲君子と曰ふは此れと始終相ひ應ずるなり仁齋伊藤氏がこの章を稱して一部の小論語と曰ひたるも至當の言を謂ふべし夫子縦ひ万世の學脈を以て自ら任せざるも万世の學脈は夫子に歸せざるを得ざる者あり即ちこの一章の旨を領會して知るべし子曰學而時習之不亦悦乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不愠不亦君子乎夫れ天の人を生ずる其理本と尊し先王之を立て、教となし後人之を奉じて學となす故に記者聖人の論學を群言の首に記して而してその誘人の心を想はしむ天下唯學の妙味は形容を

以て盡すべからざるなり學に止まる時なく學びて而して時々之を温習し其功加ふるありて已むなければ即ち深造して自得す亦心に浹洽して而して悦ばしからずや天下の人皆我れと此學を共にする者なり然れども學は我に在り初めより朋の來るに意なくして而して朋ありて遠方より來り聲氣の感召するは亦共に暢適を爲して而して樂しからずや然れ共學中の消息は以て人に語り難し即ち人も知るに及ばざるあり而るに學の悦ぶべきあり朋の樂むべきありて少しも含悶を爲さずして境遇の齊一なるは亦素修の君子ならずや夫れ孰れか此意を知る者ぞ學者も亦之を自得自證せんのみと夫子この章に於て纔に學の字を説きしに我れと朋と人とを融通して一體となし而して其一體は悅樂君子是れなり夫子の人品も亦此れに因りて以て想見すべきのみ其語氣に至りては三不亦是れ決詞ならずして約略に指點する語なり三平字は一直に説定せず帶疑の詞に似せて人の自ら想念し去るを待つなり聖人の人を誘ふ其氣象何んそ其れ温厚和藹此に至りし乎朱子曰く學而時習之此れは是れ論語の第一句句中の五字輕重虛實の同じからざるありと唯も然れ共字々皆意味あり一字として著落なきはなし學の言たる效なり

り己れに未だ知らず未だ能くせざる所ありて而して夫の知者能者に效ひ以て其知能せんとを求むるの謂なり而字は上を承け下を起すの辭なり時は時として而して然らざるなきなり習は重複温習するなり之はその知る所の理能くする所の事を指して而して言ふなり言ふは人既に學びたり而して又その知る所の理能くする所の事を温習するなり聖言約なりと唯も而れども指意曲折深密にして窺盡なきと此の如しと余は謂ふ悅樂君子は是れ時習中の眞光景にして而して夫子生平學行の始末は是一章これを盡すに足ると是を以て朱子又之を解して曰く所謂學とは是れに效ふ所ありて而して其成るを我れに求むるの謂なり己れの未だ知らざるを以てして而して夫の知者に效ひ以て其知らんとを求め己れの未だ能くせざるを以てして而して夫の能者に效ひ以て其能くせんとを求むるは皆學の事なり學びて而して時習す何を以て悦ぶや曰く人既に學びて而して知り且つ能くせり而るにその知る所の理能くする所の事に於て又時を以て反復して而して之を温習し鳥の飛ぶを習ふが如く然すれば即ちその學ぶ所の者熟して而して中心悦豫するなり蓋し人にして而して學はざれば即ち以てその當に知るべき所の理

支 那 學

を知るなく以てその當に能くすべきの事を能くするなく固に冥行するが若きのみ然れども學びて而して習はざれば則ち表裏扞格して而して以てその之を學ぶ道を致すとなく習ひて而して時にせざれば即ち工夫間斷して而して以てその之を習ふの功を成すとなし是れ其胸中勉めて以て自ら進まんと欲すと雖も亦且に枯燥生澁にして而して嗜むべきの味なく危殆杭隍にして而して即くべきの安なからんとす故に既に學びたり又必ず之を時習すれば則ち其心は理と相ひ涵して而して知る所の者益々精く身は事と相ひ安んじて而して能くする所の者益々固く朝夕俯仰の中に從容し凡そ學びて而して知り且つ能くする所の者必ず皆以て心に自得して而して以て諸を人に語る能はざる者あり是れ其中心油然として悦傳するの味芻豢の口に甘きと雖も亦以て其美に喩ふるに足らず此れ學の始めなり理義は人心の同じく然る所我れの得て私するあるに非るなり向きや吾れ獨り之を得以て悦びを爲すに足れりと雖も然れども之を以て人に告げて而して人之を信ずるとなく之を以て人を率ゐて而して人之に從ふとなければ則ち是れ獨り此理を擅にして而して學世悵々其心の同じき所を得ざるなり是れ猶ほ十人同じ

史 學 備

く食し一人既に飽きて而して九人は咽に下らざるがごとし則ち吾れの悦ぶ所深しと雖も亦曷を爲して而して外に達せんや今吾れの學己れに得る所以の者既に以て人に及ぼすに足り人の信して而して從ふ者又此の如く其れ衆ければ則ち將に皆以て其心の同じく然る所の者を得て而して吾れの得る所獨り一己の私と爲らざらんとす夫れ我れの善以て彼れに及ぶあり彼れの心以て我れに得るあれば吾れの知る所の者彼れも亦從ひて而して之を知るなり吾れの能くする所の者彼れも亦從ひて而して之を能くするなり則ち歡欣交通し宣揚發暢し宮商相ひ宜べ律呂諧和すると雖も亦以て其樂に方ぶるに足らず是れ學の中なり常人の情人知らずして而して慍らざる能はざる者は外に待つとあればなり聖門の學の若きは則ち以て己れの爲めにするのみ本と是れを爲して以て人の知らんとを求むるに非るなり人之を知り人之を知らざるも亦何んぞ我れに加損せんや然れど人或は此れを聞きたりと雖も而れ共之を信ずる篤からざるあり之を養ふ厚からざるあり之を守る固からざるあれば則ち之に居りて安んぜず而して事に臨みて未だ必ずしも眞に不動ならざるなり今や人見知せずして而して之に處すると泰然且つ

略は讒言怒りを含みて不平するの意なし成徳の君子に非ずんは其れ孰れか之を能くせん是れより日に進みて而して已まざれば則ち下學上達聖人に至ると雖も可なり此れ學の終りなりと後世孔子の學風を窺はんと欲する者は先づこの一章三節を既誦して鞭ち得ん

孔孟人を數ふるの異同は程朱二氏の詳論あれは茲に列舉して之を示さん蓋し相ひ對比して觀るときは愈々孔子の道德の高き及ぶべからざるを見るなり程子曰く仲尼は元氣なり顔子は春生なり孟子は秋殺を并せて盡く見はず仲尼は包まざる所なし顔子は不^チ逸^シ如^ク愚^クの學を後世に示し自然の和氣あり言はずして而して化する者なり孟子は則ち其才を露はす蓋亦時なるのみ○仲尼は天地なり顔子は和風慶雲なり孟子は泰山巖々の氣象なり仲尼は迹なし顔子は微に迹あり孟子は其迹著はる○孔子宰となれば則ち宰と爲り陪臣と爲れば則ち陪臣と爲る皆能く大道を發明す孟子は必ず賓師の位を得て然る後に能く其道を明かにす譬へは許大の氣象ありて然る後に泰山と爲り許大の水ありて然る後に海と爲るが如し此れを以て未だ孔子に及はず○孔子人を教ふる常に俯して就く俯して就かざ

れば即ち門人親まらず孟子人を教ふる常に高く致す高く致さざれば即ち門人尊ばず又曰く孟子常に自ら其道を尊びて而して人尊ばず孔子常に自ら卑くして而して人益々之を尊ぶ聖賢固より間あるなり○又曰く孟子些の英氣あり才に英氣あれば便ち圭角あり或は曰く英氣甚^クの處に見はる曰く但だ孔子の言を以て之に比せば便ち見るべし且つ氷と水精との如き光らざるに非ず之を玉の自ら是れ温潤含蓄の氣象あるに比するに許多の光耀なきなり○孔孟只聖人を分開せんを要す孟子の如き若し孔子の事業を爲さば即ち儘^ク做し得ん只是れ聖人に似るを得難し譬へば綵を剪りて花を爲くるが如し花は即ち似ざる處なし只是れ他の造化の功なし

朱子曰く孟子人を教ふる多く理義の大脉を言ふ孔子は即ち切實に工夫を做す處に就きて人を教ふ○孔子人を教ふる只中間より起こし人をして便ち工夫を做し去らしめ久ふすれば即ち向上底の道理を知る所謂下學上達なり孟子は始終都べて擧げ先づ人の心性着落を識らんとを要し却て工夫を下だし做し去る○孔子人を教ふる極めて直截孟子は較や力を費す孔子人を教ふる合下便ち手を下す處あり

可なり此れ學の終りなりと後世孔子の學風を襲はんと欲する者は先づこの一章
 三節を讀んで觀して觀て得ん

孔孟人を教ふるの異同は程朱二氏の詳論ありは茲に列舉して之を示さん蓋し相
 ひ對比して觀るときは蓋々孔子の道徳の高き及ぶべからざるを見るなり
 墨子曰く仲尼は元氣なり顔子は養生なり孟子は秋養を并せて盡く見はす仲尼は
 包まざる所なし顔子は不遠如墨の學と後世に示し自然の和氣あり言はずして而
 して化する者なり孟子は剛ち其才を露はす蓋亦時なるのみ○仲尼は天地なり顔
 子は和風廣雲なり孟子は泰山巖々の氣象なり仲尼は遠なし顔子は微に遠あり孟
 子は其遠著はる○孔子中となれば剛ち中と爲り陪臣と爲れば剛ち陪臣と爲る皆
 剛く大道を發明す孟子は必ず實際の位を得て居る後に剛く其道を明かにす譬へ
 は許大の氣象ありて居る後に泰山と爲り許大の水ありて居る後に海と爲るが如
 し剛れを以て來だ孔子に流はす○孔子人を教ふる常に剛にして剛く備して剛かざ

れば即ち門人親まらず孟子人を教ふる常に高く致す高く致さざれば即ち門人尊ば
 ず又曰く孟子常に自ら其道を尊びて而して人尊ばず孔子常に自ら卑くして而し
 て人益々之を尊ぶ聖賢固より間あるなり○又曰く孟子些の英氣あり才に英氣あ
 れば便ち圭角あり或は曰く英氣甚の處に見はる曰く但だ孔子の言を以て之に比
 せば便ち見るべし且つ氷と水精との如き光らざるに非ず之を玉の自らは是れ温潤
 含蓄の氣象あるに比するに許多の光耀なきなり○孔孟只聖人を分開せんとを要
 す孟子の如き若し孔子の事業を爲さば即ち儘做し得ん只是れ聖人に似るを得難
 し譬へば絲を剪りて花を爲くるが如し花は即ち似ざる處なし只是れ他の造化の
 功なし

朱子曰く孟子人を教ふる多く理義の大跡を言ふ孔子は即ち切實に工夫を做す處
 に就きて人を教ふ○孔子人を教ふる只中間より起こし人をして便ち工夫を做し
 去らしめ久ふすれば即ち向上底の道理を知る所謂下學上達なり孟子は始終都て
 擧げ先づ人の心性着落を講らんとを要し却て工夫を下だし做し去る○孔子人
 を教ふる極めて直截孟子は較や力を費す孔子人を教ふる合下便ち手を下す處あり

り問ふ孔子何の故に人をして充廣せしめざる曰く居處恭、執事敬は充廣に非ずして何んぞ○孟子存心養性を言ふ便ち説き得て虚なり孔子の居處恭、執事敬與人忠等の語は即ち實行の處に就きて工夫を做さしむ此の如くなれば即ち存心養性自ら有り○或人問ふ孟子仁の字を説くや義甚だ分明なり孔子は都べて曾て分曉し説かず是れ如何曰く孔子は未だ嘗て説かずんばあらず只是れ公自ら理會せざるのみ譬へば今の砂糖の如し孟子は但だ糖味の甜きを説くのみ孔子は此の如く説かずと雖も却て只那の糖を將て人に與へて喫せしむ人若し肯て喫すれば則ち其味の甜き自ら説くを待たずして而して知らん○聖人の説話磨稜合縫水を盛りて漏さず一首喫邦以直報怨と言ふが如き自らは是れ細密なり孟子説き得て便ち繼なり今樂猶古樂、公劉好貨、大王好色と云ふ如きの類横渠説く孟子聖人に比すれば自らは是れ繼なり顔子未だ聖人に到らざる所以の處亦只是れ心繼なり○孔子は大衆人をして優游饜飫涵泳風味せしむ孟子は大衆是れ人の探索力耐己れに反りて自ら求めんとを要す故に伊川曰く孔子は句々是れ自然孟子は句々是れ事實と亦此意なり○孔子の言語一に沒緊要に説き出し來るに似て自らは是れ無限の道理を

包含し些しの滲漏なし道之以政齊之以刑道之以德齊之以禮と云ふ數句の如き孔子初めより曾て氣力を著けずして自ら之れ委曲詳盡道理を説き盡し更に他底に走り得ず孟子の若きは便ち氣力を用る著け文に依り本を按じ事實に據りて説き無限の首語方に説き得出す此れ聖賢の別たる所以なり
要するに孔子の人を教ふるは寛にして迫切ならず約にして浮泛ならず今日幾分の道理を理會し明日又幾分の道理を理會せしめ之を久ふすれば自然に貫通す譬へば荒田を耕すが如し今日幾分の地面を耕し明日又幾分の地面を耕し之を久ふすれば自然に周匝するなり杜預の語に云ふ所の優而柔之使自求之饜而飫之使自趨之若江海之浸膏澤之潤渙然冰釋怡然理順は實に孔門の教授法に當てし可なり然れども若し此故を以て徒だ孔子を柔弱温和の人なりと謂はば大謬と謂ふべし朱子曰く孔子天地間甚事不理會過若非許大精神亦吞許多不得と實に然り夫子が自ら負擔するの遠大なるは文王既沒文不在茲乎の語に見はれ道の顯著するもの之を文と謂ふ茲は孔子自ら問ふ或は解して此時と爲す言ふは天若し此文を喪はさんと欲せば必ず我れをして此文に與るを得せしめず今我れ既に此文に與るを

得れば是れ天未だ此文を喪ぼさざるなりと此れは孔子匡を過ぎ陽虎と疑はれて匡人に圍まれしとき従者に言ひしものなりこの下に四句あり意味はかくの如し
 その自ら信ずるの堅確なるは天生德於予桓魋其如予何の語に見はれ宋の桓魋孔子を害せんと欲す従者懼れなき能はず孔子之に言ひて曰く天德を以て予に界ふ桓魋暴と雖も其れ能く天に違ひて予を如何せんと自ら其德を信じて毫も疑懼せざるなりその精神の奮勵して挽まざるは發憤忘食樂以忘憂不知老之將至の語に見はれ葉公孔子の人物を子路に問ふ子路對へず蓋し夫子自得の趣は形容し易からざるを以てなり孔子聞きて而して之れに教へて曰く葉公の問ひは我れの人と爲りを問ふのみ汝奚んぞ他に對して説かざる其人と爲りや學を好みて厭ふなく其發憤の時に當りては遂に食を忘るに至り其自得して樂むに及んては遂に憂を忘るに至る或は憤りて而して愈々樂み或は樂みて而して益々憤り學びて以て年を忘れ惟れ日も足らず自ら老境の將に至らんとするを知らずと讀者當に此言に就きてその精神を観るべしその博く教へて辭せざるは自行束脩以上吾未嘗無誨焉の語に見はれ脩は脯なり十艇を束と爲す古は相ひ見るに必ず贊を執りて以て

(二三)

禮と爲す一束の脩はその至薄なるものなり但だ聖人の人に於けるその善に入るを欲せざるはなし故に苟も禮を以て來れば其物薄しと雖も未だ嘗て倦々として其誨を盡さずんばあらずと曰ふ此れ蓋し人の來學を鼓舞するの語なり束脩の上に於て分疏する者に非ず苟且姑息の教を屑とせざるは不憤不啓不排不發の語に見はる憤は心通せんを求めて而して未だ得ざるの意排は口言はんと欲して而して未だ能はざるの貌その鬱塞を極めて而して通せんを思ふあるは此れ憤機なり乃ち一たび之を啓けば戸の斯に開くが如し口宣説するをあらんと欲して而して未だ能はざるは此れ排機なり乃ち一たび之を發すれば矢の斯に達するが如し憤せざれば啓せず排せざれば發せざるは夫子人を激發して教を受くるの地を爲さしむるなり程子曰く憤排は誠意の色辭に見はる者なり又曰く憤排を待たずして而して發すれば即ち之を知るも堅固なる能はずと意ふに業を受くる者も此に至りて山逢險處疑無路氷到磯頭倍有聲の愉快を認取せん夫れ是の如し夫子の氣象は温良平和にして中庸を蹈み敢て過激過高の行を爲さずと雖もその意志は常に飽滿流動して委靡枯燥するまなしされば其精神も退守に在らずして

(一四)

進取に在ると知るべし殊に教授の任に至りては夫子の謙遜を以てすと雖も敢て
 辭避する所なし曰く若^{キハト}魯^ニ與^リ仁^ニ則^シ吾^レ豈^モ敢^テ抑^テ爲^ス之^ヲ不^レ服^ハ人^ノ不^レ倦^ハ則^シ可^ク謂^フ云^ハ爾^ト已^ニ矣^ト言
 ふは聖と仁とは即ち吾れ豈に敢て之に當らんや但だ未だ知らざる者に於ては之
 學びて服はず知る所の者を以て人を誨へて倦まざるは即ち我れ此の如しと謂ふ
 べきのみと蓋し聖と仁とは敢て自ら居らず學と誨とは以て己れが任と爲すなり
 爲の字は何は學の字のごとし汝爲^ル周^ノ南^ヲ召^ス南^ヲ矣^乎の爲と同じ朱註以て行の義と爲
 す恐らくは妥ならずこれ豈に夫子が白白自證の語に非ずや顔淵曰く夫子循々然^{トシ}
 善^ク誘^フ人^ヲ博^ク我^レ以^テ文^ヲ約^ク我^レ以^テ禮^ヲ欲^シ罷^レ不^レ能^ト循^ハ々^ハは次序ある貌誘は引き進むるなり博文
 約禮は教の序なり言ふは夫子循々として善く誘ひ先づ我れを博くするに文を以
 てし我れをして古今を知り事物に通ぜしめ然る後我れを約するに禮を以てし我
 が學問をして歸宿する所あり行者の家に赴き食者の飽を求むる如くならしむ是
 を以て罷めんと欲して罷むる能はざるなりとこれ又顔淵がその實景真情を言ひ
 し者なり願ふに夫子の其門人を誘ふや鼓舞作興必ず之をして踴躍して前まんと
 を欲せしむる者ありしならん其誘掖の趣は今之を口に傳へ難しと雖も親しく教

を受けたる者の情景は欲罷不能の四字に就きて見るべきのみ又夫子は門人に向
 ひて時に激勵の言を爲し其れをして志氣を振發し卑陋に陥らざらしむ即ち朝聞
 道^ヲ夕^ニ死^ス可^ク矣^ト言ふは人^ノ以^テ道^ヲ知^ルらざるべからず苟も道を聞きて之に透徹するを
 得ば死するも復た遺恨なし若し人と生れて道を聞かざれば長生すと雖も亦何を
 か爲さんと朝夕は其時の近きを甚言し死^ス可^ク矣^トは道の聞かざるべからざるを深
 言す可矣の二字嶄絶人をして惕然深省を發せしむ士志^ヲ於^テ道^ニ而^シ耻^シ惡^ク衣^ヲ惡^ク食^ヲ者^ヲ未^ダ足^ラ
 與^レ讖^也言ふは學を爲すもの心道を求めんと欲して而して衣服飲食の美ならざる
 を以て耻と爲す此れ志し得て力めず外物來り誘ふに及べば則ち又變遷し了る道
 般半上半落底の人未だ與に讖するに足らざるなりと夫子の意は惡衣惡食を勤む
 るに非ず士と爲りて志の專一ならざる者を勵すなり士^ノ而^シ懷^ク居^ル不^レ足^リ以^テ爲^ス士^ト矣^ト居は
 意の便安する所の處なり言ふは士たる者當に道義を求めて利欲を思はざるべし
 若し吾が意の便安する所の處に於て戀々として去る能はず之を去りて忘るゝ能
 はざれば則ち猶ほ衆人のごときなり何を以て士と爲さんと朽木不可^ク雕^也糞土之
 不可^ク朽^也於^テ予^ニ與^レ何^レ誅^也此れ宰予の晝寢に因りて而して言ふ朽は腐なり雕は刻畫

なり朽は観なり誅は責むるなり言ふは其志氣昏惰にして教も施す所なきなり責むるに足らずと言ふは即ち深く之を責むる所以夫子の此言を爲すは獨り宰子を責むるのみならず亦以て群弟子を警むるなり)の類の如き是れなり故に其門人皆閔々侃々として志行を磨礪し苟且怠惰の風あるなし又時に勸誘の言を爲し其れをして自得を悦び益々進修せんとを欲せしむ即ち子貢の貧而無諂富而無驕何如(言ふは貧者は常に其不足に困みて而して氣歉す故に多く諂ふ富者は常に其富有を待みて而して氣盈つ故に多く驕る若し人貧に處りて而して能く諂ふなく富に處りて而して能く驕るなくんば其造詣何如と子貢の兩而字は貧富に粘定して説き又何如の二字隱然自足の意あり)の間に答へて可也未若貧而樂富而好禮者也(可といふ者は僅に可として未だ盡さざる所あるの辭なり猶ほそれにて可也宜いと云ふがとし言ふは諂ふなきを以て諂ふ者に視驕るなきを以て驕る者に視れば其品行間あり殆んど亦可なり然れども未だ貧にして而して樂み樂む所貧に非ず富みて而して禮を好み好む所富に非る者に若かざるなりと可也の二字は他の得力の處に就きて言ひ未若の二字は即ち一轉語を下し學問一步を進むれば更に一步ある處を見はず夫子の兩而字は是れ貧富を脱開して説く者也の二字を玩べば此等の造詣更に高きと一層眼前の貧富却て我れに與かるなき者の如し子貢穎敏之を聞きて覺えず膠を解き縛を釋くと曰ひ又子貢の詩云如切如磋如琢如磨其斯之謂與(詩の意言ふ骨角を治むる者は既に之を切りて而して復た之を磋く玉石を治むる者は既に之を琢きて而して復た之を磨くと已に精にして益々其精を求むるなりと子貢夫子の言を聞きて而して乍ち解悟し即ち此詩句を引きて曰く義理の窮りなき得るありと雖ども而も未だ遽に自足すべからざる其れ斯の若き乎と是れ統べて學問の一節は一節より高く一步は一步より潤きを形容せるなりと接言したるを以て賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者言ふは賜や遂に悟りて此に及ぶ乎切磋琢磨の詩は貧富の爲めに言ふに非るなり而るに類に觸れて旁通する是の如し賜や方に與に詩を言ふべきのみ吾れ方に之を告ぐるに往を以てして而して賜已に來を知る者吾れ其至る所を窮むる能はずと來はその已に言ふ所の者即ち貧富二事を謂ふ往はその未だ言はざる所の者即ち切磋琢磨を謂ふ是れ鼓舞の語にして贊揚の語に非ず知來者の者の字は正に前文者也の二字に應じ子

る處を見はず夫子の兩而字は是れ貧富を脱開して説く者也の二字を玩べば此等の造詣更に高きと一層眼前の貧富却て我れに與かるなき者の如し子貢穎敏之を聞きて覺えず膠を解き縛を釋くと曰ひ又子貢の詩云如切如磋如琢如磨其斯之謂與(詩の意言ふ骨角を治むる者は既に之を切りて而して復た之を磋く玉石を治むる者は既に之を琢きて而して復た之を磨くと已に精にして益々其精を求むるなりと子貢夫子の言を聞きて而して乍ち解悟し即ち此詩句を引きて曰く義理の窮りなき得るありと雖ども而も未だ遽に自足すべからざる其れ斯の若き乎と是れ統べて學問の一節は一節より高く一步は一步より潤きを形容せるなりと接言したるを以て賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者言ふは賜や遂に悟りて此に及ぶ乎切磋琢磨の詩は貧富の爲めに言ふに非るなり而るに類に觸れて旁通する是の如し賜や方に與に詩を言ふべきのみ吾れ方に之を告ぐるに往を以てして而して賜已に來を知る者吾れ其至る所を窮むる能はずと來はその已に言ふ所の者即ち貧富二事を謂ふ往はその未だ言はざる所の者即ち切磋琢磨を謂ふ是れ鼓舞の語にして贊揚の語に非ず知來者の者の字は正に前文者也の二字に應じ子

實自ら進みて樂好禮の地に到るべきの意を含めりと進め、子夏の巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮何謂也、倩は口輔好きなり、盼は目黑白分るなり、素は粉地、畫の質なり、絢は彩色、畫の飾なり、詩の意謂ふ、倩盼の美質ありて而して又加ふるに華彩の飾を以てすと、子夏詩を好み、嘗て此詩を舉誦し、夫子に問ひて曰く、巧笑此の如く、其れ口輔好く、美目此の如く、其れ黑白分る、文を以て爲すなきなり、乃ち復た素以爲絢兮と云ふあり、夫れ素は則ち文なし、絢は乃ち華飾なり、未だ無文を以て華飾と爲す者あらず、此れ小子の解せざる所なり、何の謂ひぞやと、蓋し巧笑の二句自ら一意、素以爲絢兮の句又一意を進む、子貢未だ達せずして夫子の解説如何を知らんと欲す、故に此問ありの間に答へて、繪事後素、夫子、子夏に答へて曰く、子、繪事を觀ざる乎、素以爲絢の謂は繪事後素の謂なりと、言ふは詩の言、素以爲絢は即ち素を以て絢と爲すに非ず、是れ素に因りて而して絢を爲すを言ふのみ、譬へば繪畫の事の如し、必ず先づ其質地ありて而して後加ふるに文彩を以てす、則ち是れ素は常に先に在り、繪は常に後に在り、人の美好華飾、理然らざるなしと、上の素絢は明かに人を説く、此は繪畫の事を以て喻へて之を言ふ、然れども詩の辭に即きて繼に一の後の字を著け、而して詩の意了然たり、夫子の此答も亦只時に就て詩を言ふ、繪を擗くるに非るなり、然れども素先と曰はずして而して繪後と曰ふ、大に含蓄あり、子夏禮後乎の會悟を啓く所以なりと曰ひ、又子夏の禮後乎この禮は専ら儀文を指して言ふ、後は人の素心に對して言ふ、子夏夫子の繪事後素の言を聞き、禮の人に於けるも猶ほ是の如きを悟り、乃ちこの語あり、言ふは世の行ふ所の禮、容儀見るべし、意ふに必ず之れが先を爲すありて此れ其後に過ぎざる乎と、蓋し之れが先を爲す者は忠信是れなり、禮の必ず忠信を以て質と爲すは、猶ほ繪事の必ず粉素を以て先と爲すがごとし、後乎の乎の字、乃ち子夏の悟語にして問語に非るなりと接言したるを以て、起予者商也、始可與言、時已矣、起予は言ふ能く我れの志意を起發すと、商は子夏の名なり、夫子、後素を言ふの時、未だ禮後乎の處に思量し到らず、因て急に之を稱して曰く、商遂に悟りて此に及びたる乎、吾れ繪を以て詩を説きて、而して商は繪に即きて以て禮に通ず、是れ予を起發する者は商なり、夫れ詩の意は盡くるなし、素絢に即きて知るべし、詩の包む所は廣し、禮に即きても推すべからざるはなし、商の穎悟乃ち是の如し、始めて與に詩を言ふべきのみと、朱子曰く、聖人胸中許多の道理を包藏すと雖も、若し

一〇九

人の之を叩く無ければ則ち終に自ら外に發揮するなし、一番説き起せば則ち一番精神ありと、起予者、商の一語或は解して、夫子能くせずして、予夏之を教ふと謂ふこと勿れと進めたる類の如き是れなり、故に其門人皆翹々駉々として學問に勤勉し、小成自足の意あるなし、

夫子の弟子に於ける、その平日言行問答の間に於て固より其學力の至る所を知る、然れども其將に待つ所ありて爲さんと欲するの志は則ち盡く知る能はざるなり、論語中、四子侍坐の一章に於て、夫子先づ問を發して各々その志を言はしむ、記者意を著けて其言辭氣象を描寫し、夫子の聲音笑貌を併せて體然、目前に現出せしめり、意ふに夫子の之を問ひし者はその自ら知るの何如を觀、之をして未だ至らざるあるを知りて自ら勵まざしめんと欲す、これ亦その教を爲す所以なり、因て茲にその一章を全載して師弟對晤の情況を想見せしむ、子路、曾皙、冉有、公西華侍坐、子曰、以吾一日長乎爾、毋吾以也、居則曰、不吾知也、如或知爾、則何以哉、子路名は由、曾皙名は點、冉有、名は求、公西華名は赤、この四人夫子の側に侍坐す、夫子因て其志を觀んと欲し、之を誘ひて言を盡さしめて曰く、年を以てして言へば吾れ一日爾より長ずるありと

雖も然れども、爾我が長ずるの故を以てして言ふを難かると母れ、尙ほそれ懐ふとあらば必ず傾吐して可なり、且つ爾平居自ら念ふときは即ち曰く、吾れの才識、世用と爲るべし、但だ人我れを知る莫きのみと、如し人爾を知りて之を用ゐるあらば、計るに必ず以て人の知に副ふ者あらん、將に何を挾持して以て自ら見はさんとする耶、子路率爾而對曰、千乘之國、攝乎大國之間、加之、以師旅、因之以饑饉、由也、比及三年、可使有勇、且知方也、夫子哂之、子路迫りて自ら見はさんと欲するの意あり、乃ち率爾として遲回する所なくして對へて曰く、今千乘の國あり、兵賦繁多にして且つ大國の間に管攝せられ、動もすれば掣肘多し、之に加ふるに師旅を以てして而して調發寧からず、之に因るに饑饉を以てして而して荒歉足らず、如し由を知る者あり、由をして此れに當りて之を爲めしめば、外、強鄰を禦ぎ、内、百姓を養ひ、政教兼ね舉げ、三年に及ぶ比はひ、民をして敵愾禦侮の勇あり、且つ親上、死長の方を知らしむべし、是れは即ち由の志なりと、夫子、子路の言張大にして毫も退讓せざるを見て微に之を笑ふ、求、爾何如、對曰、方六七十、如五六十、求也爲之比、及三年、可使足民、如其禮樂、以俟君子、夫子隨て轉じて而して問ふ、求、爾の志は何如と、冉求對へて曰く、敢て千乘の國を望ま

ず、但だ方六七十里、如しくは五六十里、地狭く民寡く、拊循徧くし易し、如し求を知る者あり、求をして此に處りて之を爲めしめば、田里を制し、樹畜を教へ、徭を軽くし、賦を薄くし、三年に及ぶ比はひは、則ち仰事俯育、その資あり、水旱凶荒、その備あり、家給し、人足りて、凍餒の虞なからしむべし、富足の餘に乗じて、禮あり以て之を節し、樂あり以て之を和する如き、其れ少くべけんや、是れ求の能くする所に非ず、願はくは以て君子の優爲する者を俟たんと、赤爾、何如、對曰、非曰、能之、願學焉、宗廟之事、如會同、端章甫、願爲小相焉、夫子又轉じて而して問ふ、赤爾の志は何如と、公西赤對へて曰く、赤禮樂の事に於て敢て我れ之を能くすと曰ふに非ず、但だ其志願は之を習學するに在り、彼の宗廟に祭社の事あり、王朝に會同の事あるの日、如し赤を知る者あり、赤をして其間に臨ましめば、玄端の禮服を服し、章甫の禮冠を冠し、願はくは禮を贊するの小相と爲り、邦君に隨ひて朝廟の中に周旋せん、是れ赤の志なりと、點爾、何如、鼓瑟希、鏗爾、舍瑟而作、對曰、異乎、三子者之撰、子曰、何傷乎、亦各言其志也、曰、暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、夫子喟然嘆曰、吾與點也、三子志を言ふの時に方り、曾點正に瑟を鼓せり、三子志を言ひて既に畢り、夫子乃ち曾點を呼び、

(三三)

問ひて曰く、爾の志は何と、點、夫子の問を承け、瑟を鼓するの聲、方に纔に間歇し、手を以て瑟を推して起ち、餘音鏗爾として聽くべし、乃ち從容對へて曰く、點の志たる、三子者の撰に異なるあるを覺ゆと、以て言ひ難しと爲すに似たり、夫子曰く、異なるも何んぞ傷まんや、亦各々その懐く所の志念を言ふなりと、點乃ち曰く、今時は暮春に非ずや、風日和煦以て懷を伸ぶるに足る、春天單袷の服は即ち既に成れり、因て而して同志の徒を偕なひ、冠して成人なる者五六人、少年の童子六七人、少長相ひ携へ、沂水の温泉に遊浴し、舞雩の高爽に涼を取り、盡きざるの意を以て暢へて歌詠と爲して而して坦歩旋歸す、亦樂しからすや、點の異なる者は此の如しと、夫子方に二三子と所志を叙列して、而して點獨り外を願はず、その居る所の位に素して眼前の景物を樂み、其胞次悠然萬物自得の妙を得、三子の氣象と眞に別なり、是に於て夫子心に契ふあり、喟然として嘆して曰く、點の志、吾か問ふ所の表に出で、覺えず之を聞き、て而して意遠し、吾れ點と之れを同くせんと、三子者出、曾皙後、曾皙曰、夫、三子者之言、何如、子曰、亦各言其志也已矣、曰、夫子何哂由也、曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂之、唯求則非、邦也、與、安見方六七十如五六十、而非邦也者、唯赤則非、邦也、與、宗廟會同、非諸侯而何、

(三三)

赤也爲之小孰能爲之大三子既に所懷を罄くす是に於て皆出で退きて而して唯曾
 皙獨り後る乃ち夫子に問ひて曰く夫の三子者の言ふ所その得夫何如んぞや夫子
 曰く富強を言ひ禮樂を言ふ亦各々其志の存する所を言ひしのみ固より大に誇り
 て而して實なきに非るなりと皙又問ひて曰く既に各々其志の存する所を言へば
 則ち由の志も亦由の優爲するならん夫子何んぞ獨り由を晒ふや夫子曰く凡そ國
 を治むる者は必ず禮讓を以て先と爲し而して後上下争はず各々その分に安んじ
 て而して國治むべし今由の言辭急遽にして遜讓を失ふあり是を以て之を晒ふの
 みと黜冉求も亦國を爲むるに讓らざるを疑ふ故に又問ひて曰く冉求の志民を足
 すに在りその治むる所の者亦必ず一國の民ならん豈に方六七十里如しくは五六
 十里の小なるも邦に非ずと謂はんや夫子曰く國に大小あり其邦たるは則ち一な
 り安んぞ百里の者即ち邦と爲りて而して六七十五六の者遂に先王分封の邦に
 非る者を見ん求の任ずる所も亦邦を爲むるの事なり黜夫子が求の言能く讓ると
 明説せざるを以て又問ひて曰く赤の志禮樂に在りと雖も而れども願ふ所の者は
 則ち小相に過ぎず豈に赤の爲むる所亦邦に非る歟夫子曰く宗廟以て親を享し會

以て隣を睦くす皆諸侯の事なり赤の志既に此に在り特だ小相を以て自ら謙する
 のみ儼し赤の禮樂に爛へるを以てして之れが小を爲さば亦孰れか能く其右に出
 でし而して之れが大を爲さんやと程子之を評して曰く古の學者優柔厭厭して先
 後の序あり子路冉有公西赤の如き志を言ふと此の如し夫子之を許すも亦これを
 以てす自ら是れ實事なりと范氏曰く夫子人を教ゆる修身の事は皆人を治むる所
 以なり故に門弟子をして各々その志を言はしめその學ぶ所を視て而してその天
 下に及ぼす所以從て知るべし夫子謂ふ子路賦を治め冉有宰と爲り公西華賓客と
 言ふと夫子曾て此評あり蓋し三子の志と其學ぶ所と未だ曾て此に在らざればあ
 らず而して夫子も亦以て之を稱す曾皙の如きに至りては夫子の所謂狂なり狂者
 進取して大道に志す故に國を治むるの事言ふに足らざるあり浴乎沂風乎舞雩詠
 而歸も亦老者安之朋友信之少者懷之此れ孔子の語の意ならんのみと朱子曰く曾
 皙言志の間に答ふと雖ども實は未だ曾て其志の爲さんと欲する所を言はず物外
 に逍遙し當世の務を屑とせざる者あり而るに聖人此に與みして而して彼れに與
 みせざるは何んぞや嘗て是れに由りて之を思ふに爲學と爲治と本來只是れ一統

の事、他日の用ゐる所は今日の存する所に外ならず三子却て分ちて兩截と作して看る、軍旅を治め財賦を治め禮樂を治むるが如きも皆學者の當に理會すべき所なり然れども須らく先づ自家の心を理會すべし常々神清く氣定まり涵養して直ちに清明在身、志氣如神、孔子の語に到れば則ち天下爲すべからざるの事なし程子の所謂不得以天下事物挽己己立、後自能了常得天下事物、是れなりと又曰く爲學爲治を以て兩截と作して看了る所以に氣象宏ならず事業、至處に到る能はず曾點の沂に浴し零に風し自ら其樂を得るが如きは却て孔子の、疏を飯し水を飲み、樂みその中に在り顔子の、陋巷箪瓢其樂を改めずと襟懷相似たり、大抵士の未だ用ゐられざる須らく天下の物を舉げて以て吾が天理自然の安きに易ふるに足らざるを知るべし方に是れ本分の學者なりと陳氏曰く三子言ふ所の者は事功其志實にして而して小なり點の言ふ所の者は理趣其志高くして而して大なり點は三子が行ふ所の實に及ばず三子は點が見る所の高きに及ばず一時の言ふ所を以て之を觀れば三子は事爲に規々として而して點は理趣に超然たり宜也夫子の獨り之に與みざるや今よりして而して論ずれば學者必ず曾點見處の高きあり以て其跡を立てて又

三子行處の實あり以て用を達し始めて弊なしと爲す然らざれば狂に流れざるある鮮きのみと四氏の評論この章の意を解するに於て皆各々當る所あり因て併せて之を録す學者の誤解せざらんを庶幾するのみ、

孔門の教は實行を重んず故に人をして道を求め業を立てしむるに於て人に因りて教を施し必ずしも一轍に依らず然れども要するに其偏處を救ひ若しくは其缺處を補はしめ以て其徳行を完全ならしむるに在るのみ此意は子路、冉有を進退するの言に於て尤も明知すべし子路問、聞斯行、諸子曰、有父兄在、如之、何其聞斯行之、子路勇を好み、意必行に在り嘗て聞くありて而して未だ之を行ふ能はざるを患ふ因て問ふて曰く人の道に於ける能く行ふを以て貴しと爲す耳、聞く所あれば即ち當に勇み往きて之を行ふべき乎、夫子その意の、遽に行ふに在るを知るや曰く凡そ事は父兄の在るあり必ず須らく義理を斟酌し時勢を審量すべし奈何んぞ悍然我が意に率ひて之を行ふべけんや、冉有問、聞斯行、諸子曰、聞斯行之、冉有意強からず自ら審するの意あり嘗て道を悦びて而して力の足らざるを患ふ因て問ふて曰く人の道を求むる、力行甚だ難し耳、若し聞く所あらば即ち宜しく勉勵して之を行ふべき

平夫子その意の「行ふを難かるに在るを如るや曰く善を行ふ宜しく推諉すべからず」も聞く所あらば即ち宜しく其因循を去りて其志氣を鼓すべし豈に篤實に之を行はざるべけんや公西華曰由也問聞斯行諸子曰有父兄在求也問聞斯行諸子曰聞斯行之赤也或敢問子曰求也退故進之由也兼人故退之（この時公西華二つの問ひ同じくして而して答の異なるを見て感ひなき能はず因て問ふと曰く由や問ふ聞く斯に之を行はんかと夫子既に父兄の在るありと曰へり以て當に酌量して而して行ふべしと爲すことし由や問ふ聞く斯に之を行はんかと夫子何んぞ即ち由に訓へし者を以て求に訓へずして而して又聞く斯に之を行へと曰ふ以て當に即ち行ふべしと爲すことし赤や或敢て其故を問ふと夫子之を解して曰く聞く斯に之を行への説は是れ之を進むるに爲すありを以てせしなり求や天資退避故に之を進めたり父兄の在るありの説は是れ之を退けて其爲すを善くせしめしなり由や天賢人を兼ね故に之を退けたり總べてその行を善くせんと欲してなり夫れ何んぞ或はんと蓋し由に就きて之を言へば聞きて而して行ふその聞くこと必ず精しからざるものあり其行ふこと必ず精しきものあり其行ふと必ず慎むものありは此中已に低回詳審の意あり其生平の過捷を救ふ所以なり求に就きて之を言へば聞きて而して行ふその聞くこと必ず精しきものあり其行ふと必ず慎むものあり聞く斯に行はしむるは此中已に鼓舞率作の思あり其生平の過遲を救ふ所以なり夫子の一進一退は總べて是れ他の行ひ得て恰好ならんを要す然れども其意は俱に力行に在るを知るべし夫子他日孟懿子孟武伯子游子夏の孝を問ふに答へしとき其旨の同じからざるも亦此意なり孟懿子問孝子曰無違樊遲御子告之曰孟孫問孝於我我對曰無違樊遲曰何謂也子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮孟懿子は魯の大夫樊遲は夫子の弟子なり孟懿子問ふ親に事ふるは必ず如何して乃ち以て孝と言ふべきと夫子之に答へて曰く親に事へて能く違ふとなければ則ち孝なりと懿子復た問ふ能はず夫子その未だ「違ふなし」の旨に達せずして親の令に従ふを以て孝と爲さん恐る故に樊遲車御の時に因りて之に告げて曰く孟孫嘗て孝を我に問ふ我れ對へて曰く違ふなしと意は「違ふなし」の旨を語りて懿子をして之を聞かしめんと欲してなりと樊遲問ふて曰く「違ふなし」の旨何んの謂ぞや夫子曰く所謂「違ふなし」は是れ禮に違はざるなり尊卑上下各々一定の禮あり父母在世の時

は此中已に低回詳審の意あり其生平の過捷を救ふ所以なり求に就きて之を言へば聞きて而して行ふその聞くこと必ず精しきものあり其行ふと必ず慎むものあり聞く斯に行はしむるは此中已に鼓舞率作の思あり其生平の過遲を救ふ所以なり夫子の一進一退は總べて是れ他の行ひ得て恰好ならんを要す然れども其意は俱に力行に在るを知るべし夫子他日孟懿子孟武伯子游子夏の孝を問ふに答へしとき其旨の同じからざるも亦此意なり孟懿子問孝子曰無違樊遲御子告之曰孟孫問孝於我我對曰無違樊遲曰何謂也子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮孟懿子は魯の大夫樊遲は夫子の弟子なり孟懿子問ふ親に事ふるは必ず如何して乃ち以て孝と言ふべきと夫子之に答へて曰く親に事へて能く違ふとなければ則ち孝なりと懿子復た問ふ能はず夫子その未だ「違ふなし」の旨に達せずして親の令に従ふを以て孝と爲さん恐る故に樊遲車御の時に因りて之に告げて曰く孟孫嘗て孝を我に問ふ我れ對へて曰く違ふなしと意は「違ふなし」の旨を語りて懿子をして之を聞かしめんと欲してなりと樊遲問ふて曰く「違ふなし」の旨何んの謂ぞや夫子曰く所謂「違ふなし」は是れ禮に違はざるなり尊卑上下各々一定の禮あり父母在世の時

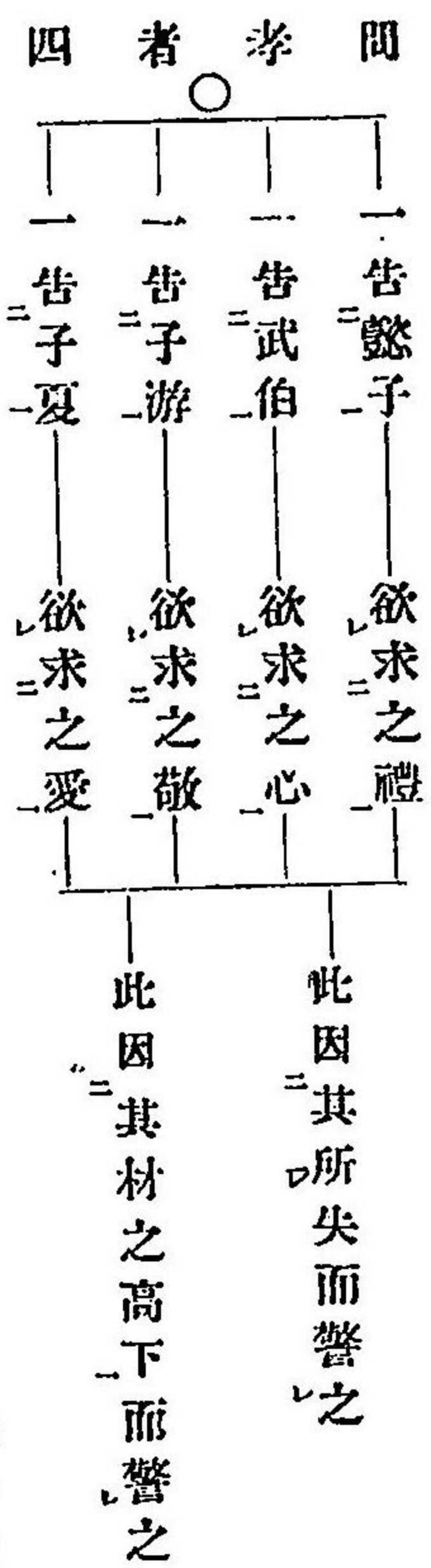
の如きは定省奉養俱に禮に依る、その歿するに及びてや殯葬祭享、必ず誠に必ず信にす亦俱に禮に依る禮及はざれば則ち之を簡と謂ふ簡は、是れ其親を慢して而して孝に非るなり太だ過ぐれば則ち之を僭と謂ふ僭は、是れ其分に踰へて而して孝に非るなり惟始めより終りに至るまで禮に一にして而して苟もせず此れ之を違ふなしと謂ふ此れ之を孝と謂ふと此章無違の違は左傳昭德、違の違と同じ最初は渾説し後に至りて禮に違ふの意を明かにす古人の語、凡そ理に悖るもの之を違と謂ふ違の字包む所甚だ廣し而れども、夫子意中指す所は禮を僭すべからざるの上、に在り、これは當時三家孟孫、叔孫、季孫禮を僭す夫子之を規せんと欲する久し孟懿子は乃ち孟氏の子弟にして魯の大夫なり故にその親に孝するを問ふに因て之に答ふると此の如きなり然れども夫子の言は皆是れ人の通行する所の者なれば無違の二字も専ら懿子の爲めに發したるに非ず人々皆當に此の如くなるべし孟武伯問、孝子曰、父母惟其疾之憂、孟武伯は孟懿子の子、孟武伯孝を問ふ夫子曰く天下子を愛せざるの父母なし父母子を愛するの心を知れば則ち人子親に事ふるの孝を知らん父母の子に於けるや倦々切々其疾病あらんとを恐る特り疾ある時のみ

愛ふるに非ず亦常にその愛護の謹まざるを憂ふ此れその子を愛するの心至らざるなきを見るべきなり子たる者能く父母の心を昧して而して凡そ其身を守る所以の者亦至らざる所なければ斯れ以て孝と言ふべしとこれは武伯、富貴逸樂の地に處るを以て服色起居、一も愼まざるあれば最も疾を致し易しこれ父母の尤も憂を致す所なり故に夫子、心身の上に於て指示し謂ふ能く其身を愛するを知らば是れ父母の愛を解く所以にして其親に孝するものなりと承顔法を略して解愛法を説きたるなり子游問、孝子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別乎、子游姓は言、名は偃、夫子の弟子、子游孝を問ふ夫子曰く人子の親に於ける飯食供養固より缺くべからず然れども必ず尊敬の心ありて方に孝と謂ふべし今世俗の人の若きは能く飲食を以て父母に供養するを謂て即ち之を孝と謂ふ知らず徒に飲食を以て供養するのみなれば微賤、犬馬の類の如きに至りても人之を養ふあり若し親に事ふる者徒だ供養を以て事と爲し尊敬の心なければ彼の犬馬を養ふ者と何んぞ分別する所あらんやと按ずるに犬馬を以て父母に比する甚だ不倫と爲す然れども人、尊敬の心一たび至らざるあれば即ち其親を視る所の者實に以て犬馬に

異なるなし而して自ら知らざるなり、故に危詞以て之を悚動す戒を設くるの言自ら然らざるを得ず、これは子游素と簡易の性あるを以て夫子その或は講らずして尊敬を失ふに至らんとを恐る故に夫子その愛して而して能く之を敬し以てその孝を全ふせんとを欲したるなり、然れども世人親に事ふる徒だ供養を以て事と爲し恩に押れ愛を恃みて而して不敬の罪に陥るを知らざる者あり、即ち夫子の言、衆人の身上に於て看るも亦未だ嘗て益なくんばあらず、子夏問、孝、子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒色先生饌、曾是以爲孝乎、子夏、姓は卜、名は商、夫子の弟子、子夏孝を問ふ、夫子の曰く、人子親に事ふるの際、惟色を難しと爲す、色は偽を以て爲すべからざるなり、深愛の心、中に根ざすありて而して後、愉婉の色、外に見はるゝあり、夫の父兄に事ふる若き、子弟たる者代はりて其勞に服し、子弟に酒食あれば父兄に進奉して以て飲饌に供す、此は則ち力の勉むべき所にして而して事の爲し難きなき者、其れ以て孝と爲すに足らんやと蓋し人の性情はその動くに當りて而して色傳ふるに形を以てす、色難の二文字備はり意足り他の千萬言に抵るに足るなり、これは子夏、身を持する嚴にして規矩を謹み或は温潤の色少し、夫子その此れを以て親子の恩愛を

傷はんを恐る故に夫子その敬して而して能く之を愛し以てその孝を全うせんとを欲したるなり、夫れ嚴威、嚴格は親に事ふる所以に非らず、是れ論なきのみ、然れども人子胸中、幾に些の親を愛せざるの意あれば、便ち不順の氣象あり、これ愉婉の色、難しと爲す、所以なり、されば夫子の子夏に告ぐる所の者亦他の人子に教ふべからざるはなし、蓋し此四章、言同じからずと雖も、而れども意は即ち一なり、何となれば、孟懿子、孟武伯、子游、子夏の孝を問ふ皆親に事ふるに意ある者なり、夫子各々その情性上に於て覺察し之をして偏勝せしめざらんと欲す、四子者果して自ら覺察すれば其孝、平正にして而して病なからん故にその間に答ふる同じからずして皆その短なる所を言へり、當時之を聽く者止だ一二句にして皆、其身に切なりしと知るべし、譬へば良醫の病を診するが如し、其人の病症に因りて藥方は異なりと雖も、其病に的中せざるなし、子游人と爲り愛、餘りあり而して敬足らず、子夏は則ち敬、餘りありて而して愛足らず、この事二人の平生を觀て知るべし、善いかな、朱子の言、子夏の病は乃ち子游の藥、子游の病は乃ち子夏の藥、若し色難を以て子游に告げ敬を以て子夏に告ぐれば、則ち水を以て水を濟ひ、火を以て火を濟ふなり、故に聖人の藥は

各々其病に中ると朱子又曰く既に二失を知れば則ち中間須らく自ら箇の之を處するの理あるべし愛して而して敬せざれば眞愛に非るなり敬して而して愛せざれば眞敬に非るなりとこれ實に聖人の旨を得たる者と謂ふべし今夫子の四子に告げし者を圖表にして之を示さん



この因其所失と因其材之高下とは程子の説に従ふものなり朱子曰く子游見處高明にして而して工夫は則ち疎なり子夏較や謹みて法度を守り木子に依りて做す云々とこれ蓋し其材の高下を言ひしもの歟總べて之を言へば四章の中に於て無違の二字意思濶し懿子の爲めに發したる者は衆人に告ぐる者なり然れども聖人は衆人に告ぐる意思なりと雖も若し孟懿子の身上に就きて看れば自ら是れ大段切なり其の他告ぐる所の若きは却て其人の思ふる所に就きて意思多し然れども聖人は専ら一人の身上に就きて説くと雖も若し衆人の身上に於て看れば亦未だ皆て益なくんばあらず是れその教の博く通ずる所以なり

備者の道は仁を以て主と爲すと世人の知る所なり然れども夫子は専ら實行を尙びしを以てその平日門人に教へし者は未だ理論を立て、本原上より説き來らざりき然れども若し孔門の教に根原なしと言は、大謬なり夫子の一言一語その裏面には必ず根本の在るあり即ち仁の如きも多きは事に就きて言へども自ら心性を理會し居りながら言ふ但だ孟子の如く漏洩せざるのみ論語の書仁を説く處最も多し然れども論語は後世に所謂語録の類にして平日その門人と問答せし者多きに居るされば零々星々に説話して綱目もなく順序もなければ其言ふ所は一として眞理に非るはなし譬へば大海の如きも亦是れ水、一勺も亦是れ水なるが如し千首万語皆是れ一理なり若し眞に一理に透徹し得れば之を他の道理に推すも亦通ずるとを得ん若し能く一理より衆理に推究し得れば最上の道理に達するも亦難からず然れども是れ上智の人に限る顔子曾子の如きは蓋し此に達せり是を以て夫子は切實に工夫を做さしめんとを務めたりされば弟子の仁を問ふも仁字

の義は都へて理會し居りて之を行ひ之を爲すの工夫即ち求仁之方を問ひしとぞ
 知らる但だ弟子の造詣に同じからざるあれば夫子の之に答ふるも異なれど其言
 は皆的當なり人若し合はせて而して之を觀ば仁の躰段も亦知るとを得んか仁の
 解釋は後に至り孔子の學術に於て詳論すべし茲に門人の仁を問ふに當り其材の
 高下に因りて教示したる二三の例を舉示すべし夫子顏淵の仁を問ふに答へて克
 己復禮と曰ひその其目を請ひ問ふに及びて非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動
 と曰ふ仲弓の仁を問ふに答へて出門如見大賓使民如承大祭己所不欲勿施於人
 邦無怨在家無怨と曰ひ司馬牛の仁を問ふに答へて其言也訥と曰ふ言ふ所各々異
 れり朱子この三章を解説すると詳明皆聖人の意を得たり朱子曰く夫子群弟子に
 答ふる却て是れ細密顏子に答ふる者却て是れ大綱蓋し顏子は純粹にして許多の
 病痛なし所以に大綱にて之に告ぐ其目を請ひ問ふに至りて答ふるに四勿を以て
 す亦是れ大綱にて説く其他の弟子に答ふる者此の如くならしめば必ず入頭の處
 なけん司馬牛に答ふるに其言也訥を以てするが如き是れその病處に隨ひ之をし
 て工夫を做さしむ若し能く言を訥すれば即ち牛の克己復禮なり樊遲に答へ仲弓
 に答ふるの類に至りても其言に由りて以て之を行はば皆克己復禮の功なりと又

曰く克己復禮は事躰極めて大なり顏子の聰明剛健に非れば以て擔當するに足ら
 ず故に獨り以て顏子に告ぐ其他の言ふ所の如き出門如見大賓使民如承大祭の如
 き仁者其言也訥の如き又居處恭執事敬の如き都べて是れ克己の事都べて是れ仁
 を爲すの事但だ且らく一事に就きて説く然れども工夫を做し得て到れば一般な
 りと又曰く克己復禮は是れ剛健勇決一上して便ち做し了る仲弓に告ぐる所以の
 者の如きは是れ他をして平穩に做し去り慢々地に消磨し了らしむ譬へば藥を服
 するが如し克己は一服して便ち効を見はす敬恕出門如見大賓使民如承大祭は是
 れ敬己所不欲勿施於人は是れ恕は漸々藥を服して其病を磨し去るなり又曰く顏
 子力量大なり聖人便ち他に就きて一刀兩斷す仲弓の如きは即ち是れ門を閉ぢて
 自ら守り賊を放ちて入り來らしめず敬恕の上更に工夫を做すに好し又曰く只心
 術の間微に些子非禮の處あらば亦須らく淨盡截斷し了るべし顏子力量大なり聖
 人便ち他をして性に索めて克ち去らしむ譬へば賊來るが如し顏子は是れ歩を進
 めて之を斷殺す仲弓に教ふるに敬恕を以てす是れ他をして壁を堅くし野を清め

路頭を截斷し賊をして來らしめざるを教ふと又曰く仲弓は資質溫粹顔子は資質剛明顔子の仁に於ける剛健果決天旋り地轉じ雷動き風行くが如く做し將ち去る仲弓は則ち敏藏嚴謹に做し將ち去る顔子は創業の君の如く仲弓は守成の君の如し顔子は漢の高祖の如く仲弓は漢の文帝の如し又曰く顔冉二子の仁に於ける譬へば賊を捉ふるが如し顔子便ち赤手那の賊を擒にし出す仲弓は則ち先づ外面に關防し然る後方に敢て手を下し他を捉へ去ると又曰く詔は忍ぶなり難んずるなり夫子牛の多言にして躁なるを以て之に告ぐるに其言也詔を以てすと曰く其言也詔は他の身上に就きて説く又較や親切なり人言語を謹み得て妄りに發せず即ち仁を求むるの端此心放たざれば便ち道理を存し得て這裏に在り又曰く司馬牛如何んぞ顔子仲弓底の工夫を做し得ん須らく是れ人を逐うて自ら理會すべし仁は之を屋に譬ふ克己は是れ大門打透し便ち入り來る主敬行恕は是れ第二門言詔は是れ箇の小門皆通すべしと雖も然れども小門は便ち迂廻し得些に是れ他の病は這裏に在り先難後得の如きも亦他の病處に隨ひて説くと其他樊遲の仁を問ふに答へて居處恭執事敬與人忠と曰ひ又仁者先難而後獲と曰ひ愛人と曰ふが如き

皆同意なり何んとなれば俱に是れ一箇の道理にして求仁之方なればなり朱子曰く孔門人に教ふる亦自ら等あり聖人人を教ふる何んぞ都べて顔曾底の事業を做さしめざらん而れども子貢子路の徒子貢子路に止まる者は是れ其才此に止まる且つ克己復禮の如き止だ是れ顔子に教へて此の如く説く然れども他人に教ふる所以も亦未だ非て是れ克己復禮底の道理ならずんばあらずと蓋し夫子群弟子の間ふ所に答ふる其材の高下に隨ひて之れに答へ吾れは行ふ能はずの説を爲さしめず故に成就する所多し是れ人に實行を教ふるに方り常に意を用ゐるべきものに非ずや

孔門の學問は求仁を主とすると言ふ前に言ふが如し然れども學問の義たる亦甚だ廣し凡そ世間の事物我が未だ知らざるものあり既知の先輩に就きて而して之を知るは學問なり古聖哲の書籍に求めて而して之を知るは學問なり乃至自ら之を己れが心に求め世事の間に經驗するも亦一種の學問なりされば學には知行の二義を兼ね居れども大抵知を以て言ふ知は人に因りて知るに非れば書に因りて知るなり白虎通漢の班固が著す所に云く學覺也覺悟所不知也と論語集註に云く

學之爲言效也と白虎通には覺の意を注し集註には效の意を注せり然れども集註下文に後覺者必效先覺之所爲と曰ひて覺の意を兼ねさせたり論語の效の字は知行を該ねて言へり故に極めて平易に之を言へば人の行ふとを見ならひて合點するなり之を字を學ぶに譬へんに效とは古人の法帖を見てその筆勢を摸するが如し覺とは復習日久しくして自らその筆意を了悟するか如し學の字は始めて殷の時に見えたり書經の説命に云く台小子舊學于甘盤と又云く學于古訓乃有獲と又云く惟學遜志務時敏厥修乃來と又云く惟黻學半典于學厥德修罔覺と孟子にも湯學于伊尹と曰へり然れども此れより前唐虞の世にも學あらざるとなし吾觀古人之象と言ふは堯なり舍己從人と言ふは舜なり拜昌言は禹なり學の字なしと雖ども然れども皆學の事なり學の字本と問字を包む學問と連言したるは孔子が易の文言に君子學以聚之問以辨之と曰ひしより來りしならん我が孔夫子に至りては尤も學問を重んじたり論語一書にも學を言ひしもの一にして足らず

茲に一辯すべきとあり近世洋學者並に漢書を解せざる者の説に論語の民可使由之不可使知之を誤解して人民に學問させず民を愚にするの言なりと云

へり此れ字義も制度も道理も知らざるの妄説にして已に島田先生及び谷干城君の辯駁あり一は東洋學會雜誌第二編壹號に載せ一は斯文學會雜誌第六號に載す共に有益の文字なれば就きて看るべし谷君の文末に云く兎に角聖人の法は壓制どころではなく今日にて云へば深切過ると云ふものなりと支那の學者にも既に此意を論破せし者ありそは陽明學流行の餘波中に挺立して卓然朱學を主張したる清の陸隴其(三魚堂と號す)是れなり余は茲に陸氏の説を掲げて島田谷二先生の論と参照するわらしめんと欲す曰く孔子の言はその知らざるに聽かすの謂に非ず正に民を治むる者多方開導し以て之をして知らしめんを欲するなり蓋し民その所以然を知らざれば則ち由るべし由らざるべし能く一時に由れども而れども異日に畔かざる能はず法制定まると雖ども而れども天下の治亂未だ知るべからず此れ聖人の深く憂ふる所なり是故に庠序學校の設月吉讀法の舉皆之をしてその所以然を知らしむる所以なり夫れ能くその所以然を知りて然る後その所當然の者以て常に由りて而して變せざるべし即ち天下の民愚智同じからず盡く知る能は

ず、而、れ、ど、も、浸、灌、の、久、し、き、務、め、て、知、る、者、を、し、て、常、に、多、く、知、ら、さ、る、者、を、し、て、常、
 に、少、か、ら、し、め、ば、則、ち、亦、相、與、に、維、持、夾、輔、し、て、以、て、共、に、大、道、に、由、り、蠢、然、無、知、の、
 民、あ、り、と、雖、亦、そ、の、所、當、然、に、安、ん、じ、て、而、し、て、變、せ、ず、昔、し、周、の、盛、時、日、と、し、て、其、
 民、を、教、導、し、其、知、覺、を、開、き、て、而、し、て、其、壅、蔽、を、去、ら、さ、る、は、な、し、成、康、の、際、に、至、り、
 て、は、則、ち、民、も、亦、多、く、は、能、く、そ、の、所、以、然、を、知、る、是、を、以、て、風、俗、淳、美、な、り、幽、平、の、
 亂、に、迄、ひ、て、而、し、て、先、王、の、遺、風、尙、ほ、在、り、當、時、教、導、の、切、な、ら、ず、浸、灌、の、深、か、ら、ず、
 し、て、徒、に、之、を、實、む、る、に、當、然、を、以、て、し、て、而、し、て、之、を、し、て、そ、の、所、以、然、を、知、ら、し、
 め、ざ、れ、ば、則、ち、豈、に、能、く、根、深、く、蒂、固、く、是、の、若、く、の、久、し、く、し、て、而、し、て、變、せ、ざ、ら、
 ん、や、後、世、こ、の、旨、を、知、ら、ず、民、を、愚、に、し、て、而、し、て、之、れ、を、知、ら、し、め、さ、る、に、非、れ、ば、
 則、ち、そ、の、知、ら、さ、る、に、聽、か、ず、學、校、設、く、と、雖、も、而、れ、ど、も、徒、に、具、文、と、爲、る、是、を、以、
 て、風、靡、き、俗、頹、れ、法、出、で、而、し、て、奸、生、じ、令、下、り、て、而、し、て、詐、起、り、法、已、む、を、得、ず、
 し、て、而、し、て、之、に、山、り、或、は、陽、に、山、り、て、而、し、て、陰、に、之、に、違、ひ、そ、の、繩、ぐ、や、終、に、廢、
 弛、打、格、に、歸、し、て、而、し、て、上、も、亦、之、を、如、何、と、も、す、る、な、し、嗚、呼、此、民、の、果、し、て、知、ら、
 し、む、べ、か、ら、さ、る、耶、抑、も、そ、の、知、ら、さ、る、に、聽、か、す、の、過、ち、耶、夫、れ、民、を、治、む、る、者、は、

之、を、束、縛、し、之、を、馳、驟、し、そ、の、一、日、に、し、て、而、し、て、道、德、の、旨、に、曉、然、た、ら、ん、を、欲、す、
 る、は、則、ち、誠、に、不、可、な、る、も、の、あ、り、若、し、夫、れ、漸、以、て、之、を、引、き、寬、以、て、之、を、導、き、多、
 方、以、て、之、を、化、し、其、知、覺、を、し、て、日、に、開、け、日、に、明、か、に、そ、の、所、當、然、に、因、り、て、而、し、
 て、徐、に、そ、の、所、以、然、を、悟、り、そ、の、所、以、然、の、者、日、に、益、々、明、か、な、れ、ば、則、ち、そ、の、所、當、
 然、の、者、益、々、鼓、舞、し、て、而、し、て、已、む、べ、か、ら、す、此、れ、三、代、の、同、じ、き、所、な、り、
 と、夫、れ、是、の、如、し、孔、子、の、意、は、そ、の、知、ら、さ、る、に、聽、か、す、の、意、に、非、ず、何、ん、ぞ、之、を、禁、
 じ、て、知、ら、し、め、さ、る、を、欲、せ、ん、や、然、れ、ど、も、諸、民、を、し、て、そ、の、理、を、知、ら、し、む、る、能、は、
 ず、惟、そ、れ、諸、民、は、知、る、能、は、さ、る、故、に、愈、々、急、に、之、を、し、て、由、ら、し、め、さ、る、べ、か、ら、ず、
 之、を、し、て、由、ら、し、む、る、は、之、を、し、て、漸、く、知、ら、し、む、る、所、以、な、り、愚、民、の、旨、を、以、て、こ、
 の、章、を、説、く、は、妄、の、又、妄、な、る、も、の、と、謂、ふ、べ、し、民、の、字、は、士、大、夫、に、對、し、て、言、ふ、不、
 可、の、字、は、義、不、能、と、同、じ、先、王、民、を、教、ふ、る、只、行、を、重、ん、じ、士、大、夫、以、上、を、教、ふ、る、却、
 て、知、を、重、ん、ず、同、じ、く、庠、序、學、校、の、中、に、在、り、て、而、し、て、由、る、者、は、民、と、な、し、能、く、知、
 る、者、は、即、ち、士、大、夫、以、上、な、り、民、の、中、稍、々、聰、明、な、る、者、あ、れ、ば、則、ち、之、を、舉、用、し、た、
 り、頃、ろ、重、野、博、士、が、論、語、新、古、註、釋、の、異、同、と、云、へ、る、演、說、筆、記、を、見、た、る、に、學、の、字、

を釋するに説文を引きて學者覺悟也と云ひ朱子の學之爲言効也と云ふは唐儒の説を探りしが如く言はれたれと是れ博士にも似合はざる粗漏の考證なり宋儒の經を解するは本と讖に斷じて證に斷せず然れどもその言道理に協ふあれば之を取りて新古を問はざるなり學の字を釋して効と云ひしは一たび尙書大傳に出で二たび廣雅に出づ決して唐儒に創まりしには非ず學の字を釋して覺と云ひしは一たび爾雅に出で二たび白虎通に出づ亦説文に創まりしには非ず蓋し効と釋せし者は行の邊を主とし覺と釋せし者は知の邊を主とす故に集註この二義を併せ取り以てその知行を兼ねるを明かにす是れ程子の説と同じ即ち程子の所謂時復思繹は知上の熟所學者在、我は行上の熟なり然れどもこの處は講學力行平説すと雖ども講學の意思終に較や多し是れ徹始徹終の學を言ふに非ずして起初頭の學を言ふが故なり故に朱子云く未知未能而求知、求能之謂學、已知己能而行之不已之謂習と又語類に之を細講して曰く知には自ら知底の學あり自ら知底の習あり行には自ら行底の學あり自ら行底の習あり小兒字を寫すが如き字の合に恁地に寫すべきを知り得

る這れは是れ學、便ち須らく心を將て思量按排すべし這れは是れ習、筆を將て去り幾個の字を寫し成すを待つ這れは行底の學、今日一紙を寫し明日一紙を寫し又明日一紙を寫す這れは是れ行底の習、人知上に於て習はず便ち行ひ去らんと要するも如何んぞ得ん人知上に於て習はずんは獨り是れ知り得て分曉ならざるのみに非ず終に諸を己れに有する能はずとこの處朱子の以先後言、知爲先、以輕重言、行爲重の意を躰して看んとを要す而るに博士は全く行上の工夫を略して云く、一口に申せば發明すると云ふことで善事を見聞して成程斯うせねばならぬ又悪事を見聞して彼の様にしてはならぬと我心に感じて發明する、佛學では悟道と云ふ是が即ち説文の覺悟也と云ふことである、と奇なる諛言や聖人の學と相去ると万里にして遠し博士又云く、今日世上人事の耳目に觸るゝ所のものに付て發明すればそれが則ち學問になつて行く譯で總て己れの發明した事は向ふの人が取て覺り向ふの人が發明した事は自分が見聞して互に發明するが所謂學問でありますと此れは全く古注家が經義を誦習するとを學としたるに反對するに非ず乎余は博士の自語相違を恐

るゝなり古注家に従へば有餘力則以學文の學、雖曰未學、吾必謂之學の學皆解すべし博士の説に従へば全く通ずべからず博士又云く、效ふと云へば人の真似をすることであり、我邦には夙に十三經注疏の説を用いたものである。其注疏の解釋が學之爲言、效也と云ふことになつて居るから誰れでも學は效ふと云ふて即ち人の真似をすることと云ふことに思ふて居ると然れども我邦王朝の學者は知らず近く三百年來、程朱の學を奉ずる儒者の中に人の真似をすると云ふとを學と信じたる者は恐らくは一人もなからん博士又云く、其效ふと云ふ説即ち人の真似をすることと云ふと頗る狹隘になる様で發明すると云ふ方が廣くなりますと然れども試に問はん行の一邊を棄て去りて獨り知のみを取れば其意義果して廣くなる乎重野博士は聖人の學を知らざる者と謂ふべきなり

今數條を舉示すべし子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、不如學也、言ふは甚しいかな學の已むべからざるや吾れ嘗て終日食はず終夜寝ねず意を思ひ一にす此時の研索專ならずと謂ふべからざるなり而れども竟に著落受用の處なし祇だ覺ゆ苦みて思ふは學ぶの深く入るに如かざるなり驟に思ふは學ぶの漸く熟するに如かざるなり偏に思ふは學ぶの兼ね致すに如かざるなり今にして而して後學の益々大なるを覺ゆと是れは夫子自ら實驗を言ひて人の徒らに思ひて學ばざるを警むるなり子曰、學而不思、則罔、思而不學、則殆、言ふは道に詣るの路は學、思その自りて入る所なり功兼ね盡さるべからず聖賢の言行を取りて而して之に倣ひ法り一々之を事に習ふこれを學と謂ふ聖賢言行の中に就きて所以然の理あり細々に心に躰會するこれを思と謂ふ二者一を闕けば不可なり若し但だ其事を學びて而して其義を思索せざれば則ち學ぶ所の者、外に在るの粗迹に過ぎず其道理精微の處、未だ心に理會する能はず心躰上、洞達分曉するを得ず常に昏くして而して得る所なし是れ罔と謂ふ若し但だ心上に在りて空々に思索して而して身に躰し力め行ひ其事を實踐せざれば則ち思ふ所の者、意中の虛見に過ぎず終に安穩著實の所なし是れ殆と謂ふ惟學びて而して思へば即ち知益々精し思ひて而して學べば即ち守益々固し學者其れ交も其功を致さざるべけんやと是れは學と思と二者偏廢すべからず偏廢すれば則ち各々其弊あるを言ふなり子曰、由也汝聞六言六蔽矣乎、對曰、未

て思ふは學ぶの深く入るに如かざるなり驟に思ふは學ぶの漸く熟するに如かざるなり偏に思ふは學ぶの兼ね致すに如かざるなり今にして而して後學の益々大なるを覺ゆと是れは夫子自ら實驗を言ひて人の徒らに思ひて學ばざるを警むるなり子曰、學而不思、則罔、思而不學、則殆、言ふは道に詣るの路は學、思その自りて入る所なり功兼ね盡さるべからず聖賢の言行を取りて而して之に倣ひ法り一々之を事に習ふこれを學と謂ふ聖賢言行の中に就きて所以然の理あり細々に心に躰會するこれを思と謂ふ二者一を闕けば不可なり若し但だ其事を學びて而して其義を思索せざれば則ち學ぶ所の者、外に在るの粗迹に過ぎず其道理精微の處、未だ心に理會する能はず心躰上、洞達分曉するを得ず常に昏くして而して得る所なし是れ罔と謂ふ若し但だ心上に在りて空々に思索して而して身に躰し力め行ひ其事を實踐せざれば則ち思ふ所の者、意中の虛見に過ぎず終に安穩著實の所なし是れ殆と謂ふ惟學びて而して思へば即ち知益々精し思ひて而して學べば即ち守益々固し學者其れ交も其功を致さざるべけんやと是れは學と思と二者偏廢すべからず偏廢すれば則ち各々其弊あるを言ふなり子曰、由也汝聞六言六蔽矣乎、對曰、未

也。居吾爾汝好仁不好學其蔽也愚。好知不好學其蔽也蕩。好信不好學其蔽也賊。好直不好學其蔽也絞。好勇不好學其蔽也亂。好剛不好學其蔽也狂。夫子子路の氣質を識る管て之を呼びて曰く由や汝は六言の六蔽を聞きし乎。對へて曰く未だなりと。夫子乃ち之に語りて曰く吾れ當に一々汝に告ぐべし。蓋し天下の事至當不易の理あらざるはなし。人必ず汝々學を好み以て理を窮究し然る後行ふ所弊なくして而して徳成るべし。仁の愛を主とするが如きは固より美德なり然れども徒に人を愛するの美たるを慕ひて而して學を好み以て仁の理を明にせざれば則ち心愛の蔽ふ所と爲り將に必ず非に従ひ人を救ふの事あらんとす。而して人已に喪ふ豈に愚と爲さざらん。智は知を主とす亦美德なり然れども徒に多知の美たるを慕ひて而して學を好み以て知の理を明かにせざれば則ち心知の蔽ふ所と爲り必ず將に鑿空杜撰高を窮め深を極めて而て放誕歸なからんとす。豈に蕩と爲さざらん。言ひて而して信あるも亦美德なり然れども徒に信實の美たるを慕ひて而して學を好み以て信の理を明かにせざれば則ち心信の蔽ふ所と爲り將に己の信を執りて而して人の利害に於て恤へざる所あらんとす。豈に賊となさざらん。直にして而して隠す

(四八)

なきも亦美德なり然れども徒に直道の美たるを慕ひて而して學を好み以て直の理を明かにせざれば則ち心直の蔽ふ所と爲り將に人の陰私を攻發して而して迫切不洪ならんとす。豈に絞と爲さざらんや。事に遇ふて勇敢も亦美德なり然れども徒に勇敢の美たるを慕ふて而して學を好み以て勇の理を明にせざれば則ち心勇の蔽ふ所となり將に其血氣の強を逞ふして而して肆行忌むなからんとす。豈に亂と爲さざらん。剛強にして屈せざるも亦美德なり然れども徒に剛強の美たるを慕ふて而して學を好み以て剛の理を明かにせざれば則ち心剛の蔽ふ所となり將に學意妄行して而して將に沈靜の度なからんとす。豈に狂となさざらん。蓋し仁智信直勇剛この六言美なりと雖も而れども學に従事せざれば遂に愚蕩賊絞亂狂の蔽あり將に美なる者も亦變じて而して惡とならんとす。一學既に透りて六蔽自ら除く學は信に六病の良藥なり。是れは子路に學を好み以て其徳を成すを教ふるなり。

六言
仁直
信勇
智剛

所好皆美德

六蔽
愚蕩
賊亂
狂絞

不學故害徳

子游對曰昔者偃也聞諸夫子曰君子學道則愛人小人學道則易使也夫子武城に之きて
 弦歌の聲を聞く時に子游禮樂の以て教と爲す故に邑人皆弦歌す夫子時の人皆
 禮樂を用ゐて以て治を爲す能はず而るに子游獨り能く之を行ふを以て驟に聞き
 て而して深く之を喜び遂に莞爾として笑ふて曰く割雞焉用牛刀と子游即ち之に
 對ふるに此語を以てす言ふは君子道を學べば則ち以て其忍びざるの心を涵養す
 るありて自然に人を愛す小人道を學べば則ち以て其下り難きの氣を消融するあ
 りて自然に使ひ易しと此處君子小人は位を以て之を言ふ是れ蓋し夫子の常言な
 り故に武城小なりと雖とも亦必ず教ふるに禮樂を以てす夫子子游の對へを嘉み
 して假之言是也前言蠶之耳の語あり是れは君子小人皆以て學ばざるべからざる
 を言ふなり子曰生而知之者上也學而知之者次也困而學之又其次也困而不學民斯
 爲下矣人の氣質各々相ひ同からず概して而して之を言へば畧ぼ四等あり氣稟清
 明天資純粹學問を待たずして自ら能く此義理を知るあり是れを生れて而して之
 を知る者と爲す乃ち品の最も上なる者なり然れども天下の上智能く幾人ある生
 來未だ便ち知る能はず必ず講求習學を待ちて而して後能く義理に通曉するあり

是れを學びて而して之を知る者と爲す是れ天に得る者未だ清純ならざるあり然
 れども一たび學問を経れば則ち道に達すべし乃ち生知の次なり又資質愚鈍にし
 て憤るが如く排するが如く困苦して學に向ふあり是れを困みて而して之を學ぶ
 と爲す乃ち學知の次なり夫の氣質偏駁にして通ぜず自ら自棄を甘んじ冥然覺る
 となく悍然顧みざる者の若きは是れ乃ち蒙昧の極なり此の如きの民斯れを下と
 爲すと是れは夫子人に學問を勉めしめ以てその氣質の變化するなり子曰十室之
 邑必有忠信如丘者焉不如丘之好學也言ふは凡そ道を求むるものは固より生質の
 美あるを貴ぶ而れども尤も學問の功あるを貴ぶ我れの道に従事するが如き敢て
 生質の美を恃まずして而して惟學力を恃み終身勉す故に成る所あり如し但だ
 生質の美のみを以てすれば即ち彼の十室の邑地狭くして而して人少し亦必ず性
 行忠信我れの如き者あらん天下の廣きに至りては又其多きに勝へず如し彼れそ
 の忠信を以て徳に進むの基と爲して而して加ふるに勤敏の力を以てす豈に皆な
 成就するを得ざらん而るに願ふに成就する者鮮し是れ我れの學に孜孜として而
 して之を好むに如かざるなりと道章の精神如不如の三字に在り須く意を著けて

看るべし是れは夫子人を勉めて學を好ましめ以て其性質の美を全ふするなり哀
 公問弟子孰爲好學孔子對曰有顏回者好學不遷怒不貳過不幸短命死矣今也則亡未
 聞好學者也夫子學を以て人に傳ふ是に於て哀公之に問ふて曰く夫子の門學者甚
 だ衆し然れども弟子の中果して孰れか學を好む者と爲す乎孔子對へて曰く人の
 學を爲す必ず之を身心に昧し時に克治を加へて而して後に之を能く好むと謂ふ
 徒に咕囁を事とし以て之を學を好むと謂ふべきに非るなり吾が弟子の中に顏回
 なる者あり乃ち眞に學を好むの人なり蓋し人意に拂るの時に當りて怒なき能は
 ず但だ血氣事を用ゐる者は一も觸發あれば即ち禁止する能はず或は此に怒りて
 而して彼れに移す者あり回は則ち然らず未だ怒らざるの先心和し氣平か既に怒
 るの後氷消し霧散す蓋し稍や粘滯あるを以てして其怒を遷さざるなり抑も人氣
 稟の偏あり過なき能はず但だ志氣萎靡の者一たび過失あれば毎に改悔を知らず
 多く前に過ちて而して後に復す者あり回は則ち然らず方に過つの時覺察する
 こと精明過ちを知るの後克治すること勇猛亦稍や繫吝を存するを以てして其過
 ちを貳たびせざるなり惟回己れに克つの功間斷あるなし故に之を學を好むと謂
 ふ惜むらくは徳に豐にして而して年に奮なり復た存せず今弟子の中回の如き者
 を求むるに已に得べからず未だ更に學を好む者を聞かざるなりと按ずるにこの
 好學は義理を嗜みて而して厭はざる處を指して言ふ不遷怒は眞に學を好みた
 る効驗なり子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已とこの語亦甚だ好し然
 れども顏子の好學は意味此れより深きと數層なり是れは顏回の好學を稱して以
 て人を勉めしむるなり

顏子所好何學論は程子(伊川)十八歳の時の作なり論議醇正辭旨明白眞に是れ
 聖學の羽翼なり因て譯して此に附記す

聖人の門其徒三千獨り顏子を稱して好學と爲す夫れ詩書六藝七十子習ひて
 而して通ぜざるに非るなり然らば則ち顏子獨り好む所の者何の學ぞや學び
 て以て聖人に至るの道なり聖人學びて而して至るべき歎曰く然り學ぶの道
 如何曰く天地精を儲へ五行の秀を得る者人と爲る其本や眞にして而して靜
 その未だ發せざるや五性焉に具はる曰く仁義禮智信と形已に生ぜり外物其
 形に觸れて而して中に動く其中動きて而して七情焉れより出づ曰く喜怒哀

樂愛惡欲と情已に熾んにして而して益々蕩すれば其性鑿つ是故に覺者は其情を約して中に合はしめ其心を正ふし其性を養ふ故に其情を性にすと曰ふ。愚者は則ち之を制するを知らず其情を縱にして而して邪僻に至り其性を枯して而して之を亡ふ故に其性を情にすと曰ふ。凡そ學の道は其心を正ふし其性を養ふのみ中正にして而して誠なれば則ち聖なり君子の學は必ず先づ諸を心に明かにし養ふ所を知り然る後力行して以て至らんとを求む所謂自明而誠なり故に學は必ず其心を盡す其心を盡せば則ち其性を知る其の性を知り反りて而して之を誠にするは聖人なり故に洪範に曰く思曰睿睿作聖と之を誠にするの道は道を信ずるの篤きに在り道を信ずる篤ければ則ち之を行ふ果なり之を行ふ果なれば則ち之を守る固し仁義忠信心を離れず造次必ず是に於てし頓沛必ず是に於てし出處語默必ず是に於てし久ふして而して失はざれば則ち之に居て安く動容周旋禮に中りて而して邪僻の心自りて生ずるなし故に顔子事とする所は則ち曰く非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動と仲尼之を稱すれば則ち曰く得一善則拳拳服膺而勿失之矣と又曰く不遷怒不貳過有不善未嘗不知知之未嘗復行也と此れ其好むの篤きは之を學ぶの道なり視聽言動皆禮なり聖人に異なる所の者は蓋し聖人は則ち思はずして而して得勉めずして而して中り從容として道に中る顔子は則ち必ず思ふて而して後に得必ず勉めて而して後に中る故に曰く顔子の聖人と相ひ去るは一息なりと孟子曰く充實而有光輝之謂大大而化之之謂聖聖而不可知之謂神と顔子の徳は充實にして而かも光輝ありと謂ふべし未だ至らざる所の者は之を守るなり之を化するに非るなりその好學の心を以て之に假すに年を以てすれば則ち日ならずして而して化せん故に仲尼曰く不幸短命死と蓋しその聖人に至るを得ざるを傷むなり所謂化之とは神に入りて而して自然に思はずして而して得勉めずして而して中るの謂なり孔子曰く七十而從心所欲不踰矩と是れなり或は曰く聖人は生れながらにして而して之を知る者なり今學びて而して至るべしと謂ふ其れ替ふるある乎曰く然り孟子曰く堯舜性之也湯武反之也之れを性にするとは生れながらにして而して之れを知る者なり之に反るとは學びて而して之を知る者なり又曰くこの又曰くは孟子の言に

不貳過有不善未嘗不知知之未嘗復行也と此れ其好むの篤きは之を學ぶの道なり視聽言動皆禮なり聖人に異なる所の者は蓋し聖人は則ち思はずして而して得勉めずして而して中り從容として道に中る顔子は則ち必ず思ふて而して後に得必ず勉めて而して後に中る故に曰く顔子の聖人と相ひ去るは一息なりと孟子曰く充實而有光輝之謂大大而化之之謂聖聖而不可知之謂神と顔子の徳は充實にして而かも光輝ありと謂ふべし未だ至らざる所の者は之を守るなり之を化するに非るなりその好學の心を以て之に假すに年を以てすれば則ち日ならずして而して化せん故に仲尼曰く不幸短命死と蓋しその聖人に至るを得ざるを傷むなり所謂化之とは神に入りて而して自然に思はずして而して得勉めずして而して中るの謂なり孔子曰く七十而從心所欲不踰矩と是れなり或は曰く聖人は生れながらにして而して之を知る者なり今學びて而して至るべしと謂ふ其れ替ふるある乎曰く然り孟子曰く堯舜性之也湯武反之也之れを性にするとは生れながらにして而して之れを知る者なり之に反るとは學びて而して之を知る者なり又曰くこの又曰くは孟子の言に

は非ず豈し先儒の言なり(孔子即生而知也孟子即學而知也)と後人達せず以謂へらく書は本と生知學の至るべきに非すと而して學を爲すの道遂に失ふ諸れを已に求めずして而して諸れを外に求め博聞強記巧文麗辭を以て工と爲し其言を榮華にし道に至る者ある鮮し則ち今の學は顔子の好む所と異れり子路使子羔爲費宰子曰賊夫人之子子路曰有民人焉有社稷焉何必讀書然後爲學子曰是故惡夫佞者子羔は孔子の弟子なり性を高と曰ひ名を柴と曰ふ昔し費の邑屢ば叛して治め難し子路會ま季氏の家臣と爲り因て子羔を薦めて費邑の宰となす子羔は人と爲り質朴鎮服して以て其亂を弭むべきを以てなり知らず子羔の質美なりと雖も而れども未だ嘗て學問せず將に内は則ち己を修むるに妨げ外は則ち人を治むるに妨げんとす之を愛するは適ま之を害する所以なるを故に夫子曰く賊夫人之子と是れ深く子路の妄學を責むるなり而るに子路悟らす遂に強ひて辭説を爲くり以て之に應じて曰く費の中民人あり以て治むべく社稷あり以て事ふべし之を治めて而して治むる所以の理を求め之に事へて而して事ふる所以の道を盡す此れ即ち學の大なる者何んぞ必ずしも拘々として誦讀に従事し然る後

に之を學と謂はんやと子路の此言蓋し其本意に非ず但だ理屈し詞窮りて辯を口に取り以て人を饒々のみ故に夫子其非を斥けずして而して直ちに之を責めて曰く是れ吾が夫の佞者を惡む所以なりと按ずるに子夏曰く學而優則仕と子産曰く學而後入政未聞以政學者也と夫子が賊夫人之子と云ふ所以も其意蓋しこゝに在り又何必及び然後の字を玩べは子路も分曉する所あり敢て讀書を廢せんと欲するの意に非ず第だ言激すれば即ち見偏なり理の是非は問はず口に信せて直談し自ら善と思はざるの事を善と言ふ佞に類するあり故に惡夫佞者と云ひ子路をして惕然省みる所あらしめんと欲す而して子羔の費に宰とすべからざるは意言外に在り是れは學問は政事を爲すの基たるを見はすなり

鳩巢室氏曰くすべて學といふは聖賢の道をつとめ習ふ事なりそのつとめ習ふに致知あり力行ありされど其理をしらねば行はれず其理をしるは書に限らねども聖賢の書を第一とする程に學といへば致知を主とし致知といへば讀書を主とすこの故に大學に自修も學なれども學をもて自修に對しぬればその學といふは致知の事なり子夏も仕而優則學といへり仕ふるも學に外な

らねども仕へていとまわれは學ぶとあればその學といふは讀書の類なるべし又子路何必讀書然後爲學といへるを見ればそのかみ孔門の學といふは讀書を専とするとしられ侍るしかいへど學は讀書に限るべからず書をよみて義理を講じ事物に即きて其理を窮むる同じく致知の事にして力行の始めなりもとより聖人の道は日用事物を外にせねば父母につかへ君につかふまづり朋友に交るより其外世にあらゆるもろくの應接に至るまで一事一物いづれか致知の地にあらざる一動一靜いづれが力行の時にあらざる善はその善なる理をきはめ悪はその惡なる理をきはめなば世事善惡ともに皆わが學中の事なり

東涯伊藤氏曰く學とは何んぞや諸を古訓に考へ之を見聞に得行事の間をして倣法覺悟する所ありて而して妄作の失なからしむるなり譬へば猶ほ字を寫す者の帖を臨し器に制する者の式に依るがごとし力を用ゐると省きて而して資する所の者深し苦も徒に其性の得る所に任せ而して前言往行を讀りて以て其徳を善へされば則ち固陋偏薄以て大事大業に當るに足らざるなり

夫子の學問に博を極め又情を極めたり然れどもその涵泳自得の餘を以て之を融貫し之を調和したるが故に人或は之を知らず且つその自言に曰く中人以上可以語上也中人以下不可以語上也言ふは凡そ人の資質に高下あり學問に淺深あり人に教ふる者は當に其力量如何を觀るべし以て一概に施すべからざるなり若し中等以上の人は專資既に異にして學力已に深し自ら超乘して而して上るべし一たび指示を経て便ち能く領會すれば則ち言ふ者適に其可に當りて而して聽く者その難を苦まず故に以て上を語ぐへきなり上とは道理の精微なる處を指す若し中等以下の人は專資既に庸にして學力未だ粹ならず尙ほ積累の功を須つ遽に精微を語ぐれば卒に解語し難し則ち言ふ者徒に其勞を覺へて而して聽く者未だ其奧を悉さず故に以て上を語ぐへからざるなり接するに世間は大半中人多きに居る云ふ所の以上以下は必ずしも上智下愚相ひ去る懸絶の如きに非ず聖人教を設け急に之を上引かんと欲する所の者は蓋し尤も中人以下の一輩に在り特だその語ぐべからざるを奈何んともするなきのみ不可以語と云ふは之を棄つるの辭に非ずして之を屬すの辭なりと以て其教授に斟酌あるを見るべし

西山真氏曰く道徳性命は理の精なり親に事へ長に事へ洒掃應對の屬は事の粗なり能くその親に事へ長に事ふるの道を盡せば即ち道徳性命も亦此に外ならず中人以下若し驟然として告ぐるに道徳性命を以てせば彼れ將た何んの従りて入る所ぞ想像億度は反て道を害する所以なり若かず且らく分明知り易き處に従ひ之に告ぐるに親に事へ長に事へ洒掃應對の屬を以てせんには此の如くなれば則ち以て序に循ひて而して力を用ひ期せずして而して自ら高遠の地に至るべし之れ聖門人に教ふる要法なり學者をして外人に問ひ内心に思ひ皆其初近なる者を先きにせしめば則ち一語は一語の益あり一事は一事の功あり泛然と外に馳騫して而して初めより身心に補ひなき者に比せざるなり

都梁李氏曰く學者の工夫を做はず都へて中人以下の時に在り教者の學者を教ふる功を用ゐると多きは不可、語上、の時に在り上を語げざるは正に著實にして已に切なるの功あり之をして隨地に自ら盡さしむ聖人人に教ふるは則ち粗より以て精に至り顯より以て微に至る必ず人に一箇循ふべき處を予ふ』

可、以、語、上、不、可、以、語、上、二、句、平、說、す、と、雖、も、然、れ、と、も、上、を、語、ぐ、べ、き、者、寧、ろ、幾、人、か、あ、る、聖、門、顔、曾、よ、り、而、下、恐、ら、く、は、之、に、當、る、者、な、か、ら、ん、若、し、其、高、下、に、隨、ひ、て、而、し、て、之、に、告、語、す、れ、ば、即、ち、其、言、入、り、易、く、し、て、等、を、躐、ゆ、る、の、弊、な、く、已、に、切、な、る、の、益、あ、り、故、に、夫、子、の、學、問、は、精、を、極、め、博、を、極、め、た、り、と、雖、も、も、そ、の、常、に、語、る、所、の、者、は、中、人、以、下、を、以、て、法、を、立、て、さ、る、を、得、ず、且、つ、資、質、は、是、れ、中、人、以、上、な、り、と、雖、も、も、然、れ、と、も、積、累、の、功、な、け、れ、ば、如、何、ん、ぞ、上、な、る、者、を、以、て、之、に、語、る、べ、け、ん、若、し、資、質、は、是、れ、中、人、以、下、な、り、と、雖、も、も、而、れ、と、も、積、累、功、至、り、已、に、中、人、以、上、の、地、位、に、造、到、せ、ば、如、何、ん、ぞ、上、な、る、者、を、以、て、之、に、語、ら、ざ、ら、ん、是、れ、中、人、以、上、は、但、だ、地、位、を、論、ず、る、の、み、即、ち、學、と、質、と、を、以、て、論、せ、ば、反、て、學、を、重、ん、し、質、を、重、ん、せ、ず、子、曰、不、怨、天、不、尤、人、下、學、而、上、達、と、是、れ、夫、子、自、ら、そ、の、下、學、を、以、て、及、門、に、示、し、た、る、者、と、雖、も、も、而、れ、と、も、其、識、趣、の、高、き、を、見、る、に、足、れ、り、且、つ、下、學、と、上、達、と、甚、だ、密、接、す、る、を、言、ふ、妙、に、深、解、あ、り、是、れ、豈、に、學、に、精、な、ら、ざ、る、者、の、言、ひ、得、る、所、な、ら、ん、や、蓋、し、下、學、至、れ、ば、即、ち、能、く、上、達、す、上、達、は、只、是、れ、下、學、し、了、り、意、思、見、識、便、ち、上、面、に、透、過、し、去、る、な、り、下、學、は、下、此、事、を、學、び、上、達、は、上、此、理、に、達、す、上、達、す、れ、ば、是、れ、見、識、自、然、に、超、詣、な、り、後、來、の、上、達、に、到、り、得、る、は、便、ち、只、こ

の下學元と相ひ離れざるなり釋子の言ふ如く下學上達の語を守るは誠に學の要
 と謂ふべし朱子之を註して云く不得於天而不怨天不合於人而不尤人但知下學而
 自然上達此但自言其反已自脩循序漸進耳無以甚異於人而致其知也(反已に不怨
 不尤を釋す自修は是れ下學を釋す循序は是れ而の字交關の處を釋す漸進は是れ
 上達を釋す無以甚異於人而致其知は吾れの爲す所初めより人を驚かし喜ばすべ
 きの事なく隨ひて亦人の知るとを致すなしと云ふが如し其知の其は上の人を指
 す此句下學を主として言ひ上達を兼ねて亦其内に在り又云く不是下學外別有箇
 上達又不是下學中便有上達須是下學方能上達と共に説き得て穩當後來學を講ず
 る者は是れ下學を離れて上達を尋ぬるならずんば即はち箇の上達を差排し倒まに
 下學の中に放入す此れ豈に聖人の學ならんや形而上の者これ道と謂ひ形而下の
 者これを器と謂ふ道は固より器を離れず然れども必ず須らく形下の中に於て形
 上の處に見到りて方に上達と爲すべし此際一にして而して二二して而して一只
 一の而字中に在りて分曉せよ達巷黨人曰大哉孔子博學而無所成名子開之謂門弟
 子曰吾何執執御乎執射乎吾執御矣達巷黨の人孔子を稱賛して曰凡そ人の才識常
 に狭小を思ふ唯孔子あり大なる哉其れ量るべからざる乎大にして而して道徳性
 命の奥細にして而して禮樂名物の微知らざる所なく能くせざる所なし其學博し
 と謂ふべし惜ひ乎博く學びて而して汎く衆藝を兼ねたれば人一藝を以て之を稱
 するを得ずして名を成す所なしと夫れ孔子の大は道全く徳備はるに在りて博學
 多能に在らす黨人聖人を稱賛すと雖ども而れども能く深く聖人を知る者に非ず
 夫子門弟子の誤りて其言を聽き將に徒だ博を務むるを以て事と爲さんとするを
 恐る故に門弟子を進めて而して之に謂ひて曰く黨人言ふ我れ名を成す所なしと
 我が専ら一藝を守る能はざるを以てのみ我れ將に何を執らんとする乎夫れ六藝
 の中一藝を執るに隨ひ皆名を成すに足る所謂御と射との者あり我れ將た御を執
 らん乎亦射らん乎二者に就きて之れを較ぶるに御は執り易しと爲す將た御を執
 りて以て名を成さんと想ふに聖人豈に眞に御を執りて以て名を成さんと欲せん
 や朱子云く聞人譽己承之以謙也としかれども亦た以て夫の道の往として在らざ
 るなきを見るなり一説に無所成名は名目を定め難きを言ふなり正に是れ博なる處
 猶ほ人莫得而名之と言ふがことしと亦通ず是れ夫子門弟子の爲めに博を貴ばざ

に狭小を思ふ唯孔子あり大なる哉其れ量るべからざる乎大にして而して道徳性
 命の奥細にして而して禮樂名物の微知らざる所なく能くせざる所なし其學博し
 と謂ふべし惜ひ乎博く學びて而して汎く衆藝を兼ねたれば人一藝を以て之を稱
 するを得ずして名を成す所なしと夫れ孔子の大は道全く徳備はるに在りて博學
 多能に在らす黨人聖人を稱賛すと雖ども而れども能く深く聖人を知る者に非ず
 夫子門弟子の誤りて其言を聽き將に徒だ博を務むるを以て事と爲さんとするを
 恐る故に門弟子を進めて而して之に謂ひて曰く黨人言ふ我れ名を成す所なしと
 我が専ら一藝を守る能はざるを以てのみ我れ將に何を執らんとする乎夫れ六藝
 の中一藝を執るに隨ひ皆名を成すに足る所謂御と射との者あり我れ將た御を執
 らん乎亦射らん乎二者に就きて之れを較ぶるに御は執り易しと爲す將た御を執
 りて以て名を成さんと想ふに聖人豈に眞に御を執りて以て名を成さんと欲せん
 や朱子云く聞人譽己承之以謙也としかれども亦た以て夫の道の往として在らざ
 るなきを見るなり一説に無所成名は名目を定め難きを言ふなり正に是れ博なる處
 猶ほ人莫得而名之と言ふがことしと亦通ず是れ夫子門弟子の爲めに博を貴ばざ

るの意を示したる者と雖も、而れども、夫子の學に博きとは、黨人の稱讚に因りて、
 而して明かなり、黨人は、只黨人の見解を成す、聖人之を聞き、て又自ら、聖人の見解を
 成す、博學と無成名と一美一惜と雖も、都べて是れ夫子の大なる處、都べて是れ夫
 子を讃むる處、口を發して大哉の一字を道ふ意、その博學を美とするに在ると疑ひ
 なし、無所成名に至りては、自ら是れ之を惜む、但た無所成名は、正に博學の故を以て
 すれば、之を惜むの意は、即ち之を美とするの中に在り、美惜總べて大の字の内に在
 り、故に朱注一の譽の字を以て之を括す、聖人の全身を以て論ずれば、學博くして而
 して名つくべきなし、則ち無名は、自ら是れ神化の處、黨人の見解を以て論ずれば、藝
 博くして名を成す能はず、只是れ聖人を惋惜する處、影響に夫子の大を見得て、夫子
 の所謂大に非ず、影響に夫子の博學を見得て、夫子の所謂博學に非ず、影響に夫子の
 無名を見得て、只是れ無所成名と道ふ、黨人固より深く聖人を知る者に非ず、而れど
 も、其語氣力を極て、張大にす、聖心自ら謙虛の極、大と説き、博と説くを聞き、て何んぞ
 敢て當らん、無所成名と説くを聞けば、皇然として、自ら名を成す能はざるを愧づ、人
 の己れを譽むるを聞き、之を承くるに謙を以てす、却て謙の至理在るあり、然すんば

(六四)

射御何事にして、而して聖人之を報りて、以て名を成さんと欲せんや
 稼書陸氏曰く、此章解者に五病あり、首節其學の博を美として、而してその一藝
 の名を成さざるを惜む、一美一惜總べて、大字の内に在り、名を成すなきを惜む
 は、是れ夫子の名を成す能はざるを惜むならず、乃ち是れ人の夫子に名くる能
 はざるを惜む、總べて是れ贊辭故に註總べて、之を譽と謂ふ、トシテ民無能名と一
 例、但た彼れの無名は、説き得て深微、此れ只博學の上に就きて、看出し説き得て
 粗淺なるのみ、蒙引存疑四書蒙引四書存疑、大哉博學を以て美と爲し、無所成名
 を惜と爲せば、則ち惜は、大の外に在り、て、而して註中の譽字と合はず、此れ蓋し
 圓外(集註圓外尹氏の註及び大全四書大全新安陳氏に本づく)而れども、圓内の
 正意に非ず、此れ一病なり、既に無所成名を將て看て、大字の外に在り、遂に謂ふ
 あり、黨人、夫子が執る所あり、て、以て名を成さんと欲す、下節は、是れ夫子の冷
 語、以て成名の二字を破る言ふは、道本と執るべきなし、名は、則ち必ず執るを須
 つ、一たび執る所あれば、便ち技藝の末に落つと、圓内之を承くるに謙を以てす、
 の意と相ひ去ると、萬里なり、知らず、夫子博に居らずして、而して執に居るは、猶

(六五)

は聖仁に居らずして爲誨爲之不準。人不倦に居るがときなり、絶えて名を破るの意なし、亦絶えて道は執るべきなしの意なし、蓋し黨人原と未だ嘗て夫子の執らんとを欲せず安んぞ夫子反言して以て道の執るべきなきを見はすと謂ふを得ん、黨人原と未だ嘗て夫子が一藝の名を成さんとを欲せず安んぞ夫子反言して以て名を破ると謂ふを得ん、此れ二病なり、註中人の己れを譽むるを聞き之を承くるに謙を以てす、此れは是れ正意、學は原と博を貴はずと云ふ、此れは是れ旁意、道在らざるなし、故に博くすべし、亦執るべし、一善を以て名くべからず、亦一善を以て名けざるを必とせず、此れ又是れ、旁人が黨人、夫子の言に就きて看出して、而して黨人、夫子並に未だ嘗て、此意あらず、人毎に此等の議論を將て正意に夾入す、此れ三病なり、此章の謙は他處と徹しく同からず、蓋し博學無名は本と極めて粗淺、黨人が稱する所の意に就きて言ふ、太宰章の多能と一例、但だ聖人謙讓の衷、但だ聖天仁縱、敢て居らざるあるのみならず、即ち博學多能も亦敢て遠に當らず、故に後章之を少賤に托す、太宰問於子貢曰、夫子、聖者歟、何其多能也、子貢曰、固天縱之將、聖又多能也、子聞之曰、太宰知我乎、吾少也

賤故多能、鄙事君子多乎哉、不多也、此章は則ち自ら執る所を商らんと欲し、博を爲す能はずして、僅に能く執る爲す能の若く然り、乃ち謙して、而して又謙するの辭、泛く謙抑と言ひて、他處と分別するなし、此れ四病なり、博學の二字、緊しく、技藝に對して、説く認めて、學問學道の學と爲す者、固より、膠る、近きは、則ち、知能を以て之に貼す、此れ、大金に本くと雖ども、然れども、知能も亦、須らく、技藝に緊貼すべし、若し、技藝を、離却して、空しく、知能と説けば、則ち、他處の學字と亦、分別なし、此れ五病なり、

晚村呂氏曰く、稼書説く所の五病、吾れ以て之に加ふるなし、但だ、愚第一病を見、るに、泥看せざるべし、第二節註に云く、我れをして何の執る所あり、以て名を成さしめんと欲する乎と、則ちその一藝を以て各を成さざるを惜む、固よりその弊たるを礙ぐるなきなり、但だ是れ、夫子の名をなす能はざるを惜むならざるのみ、

後世學者、孔門に四科四教の目あるを言ふ、是れ論語中門人が能する所に據るなり、子曰、從我於陳蔡者、曾不及門也、是れ一時感觸の言たり、夫子嘗て楚の昭王之聘に

應ず陳蔡の二國楚國の大を忌み因て夫子の行を沮む是に於て厄を陳蔡の間に受
 けたり其後夫子魯に歸り往事を追思して而して嘆むて曰く爾時吾が門の弟子我
 れに従ふ者多く猶ほ濟々たり今に至りては或は仕へ或は歸り或は歿し皆我が門
 に及ばざるなりと蓋し師弟追隨の樂これを患難に得て而してこれを平常に得る
 能はず是れ夫子の最も感慨する處夫子陳蔡の厄を念ふに因りて而して我れに従
 その人に及び我れに従ふの樂を念ふて而して門に及ばざるの慨あり昔しは則ち
 弱すと雖ども我れに従ふ者衆ければ樂む所あり今は則ち安じと雖ども我れに従
 ふ者寡ければ慨する所ありこの一節夫子が安居の時より患難の時を回想するの
 光景全く一の皆の字に在り門に及ばざる已に慨すべし而るに皆門に及ばす豈に
 聖人の思を動かさしむんや皆の字は正に滿目淒涼四顧無聊の意ありとの處夫子
 の思は只是れ其人を思ふ豫め四科を分ちて胸中に在りしに非るなり門人夫子の
 言に因り故ラニ當時患難中ニ追隨セシ者ノ姓名ヲ記シテ曰ク德行顔淵閔子騫冉
 伯牛仲弓曾點宰我子貢政事冉有季路文學子遊子夏と謂ふは如し德行を以て論す
 れば顔淵閔子騫冉伯牛仲弓の如きあり此れ皆心に得る所ありて而して之を行に

見はず者なり皆語を以て論ずれば宰我子貢の如きあり此れ皆人事に通曉し善く
 辭令を爲す者なり政事を以て論ずれば冉有季路の如きあり此れ皆材猷練達政に
 従はしむべき者なり文學を以て論ずれば子遊子夏の如きあり此れ皆古に博く今
 に通し文采觀るべき者なり同じく道藝を學び各々品校を成し相ひ與に患難の中
 に在りて而して未だ曾て夫子の傍を離るゝあざりき夫子が思慕の情に切なる
 も亦以あるかなと此一節本と難に與かるの人を重しとす而れも冠するに四科を
 以てせし者は蓋し十人皆卓越の士にして亦各々長ずる所ありしを以てなり昔日
 難に處して而して憂へず今日安に居りて而して樂まざるは實に其人を以てのみ
 夫子目前に顧盼し往事を感慨し七日の厄は長く千秋の懷に係る所以なり嗟乎唐
 虞の際には君臣あり成周の間には父子あり陳蔡の厄には師友あり師聖にして而
 して友皆賢なり聖賢首を聚めて巖厄の中に相ひ従ひ意氣慷慨絃歌輟まず是れ何
 等の光景ぞ未だ東周を成さずと雖ども却て是れ春秋一會の小唐虞想ふに當日我
 が夫子は應に落莫の感を爲さしりしなるべし此十人は皆夫子に陳蔡の間に従ふ
 者なり門人その各々長ずる所あるを以て其目を分ちて以て之を記す朱註に云く

併目其所長分爲四科と須らく并と所長との字を看るべし子貢の如き言語に長ずれども其學堂に必ず德行を以て本と爲さざらんや德行とは之を心に得て而して行事に見はす者なり但だ德行の中にも亦大小の殊なくんば非ず故に朱子謂ふ亦有德行而短於才者と未だ顔閔の德行は伯牛仲弓と同一一般なりと謂ふべからざるなり聖門德行を重んずと雖ども然れども此には只各々長る所を表す亦必ずしも德行は言語政事文學を兼ねべしと謂はず亦必ずしも德行に長ずる者は只德行あり言語政事文學ありと謂はず蓋し諸子も亦或は兼ね長ずるあり而して此には則ちその最も優る者を擧げて言と爲したるのみ若し德行を大なる者と爲して而して論すれば夫子の其門人に教ふる者皆之を德行に引かざるはなし夫子云はすや吾道一以貫之と學者才質同からずと雖も聖人の教は大都その有餘を裁し其不足を補ひ之を中庸の徳に引きて而して止む未だ嘗て分ちて言語政事文學を以て教を立てざるなりその言語を論ずるは則ち曰く敏於事而慎於言と曰く欲納於言而敏於行と曰く仁者其言也訥と子貢に告げて曰く先其言而後從之と宰我を責めて曰く聽其言而觀其行と總べて是れ之を德行に引

く故に曰く有徳者必有言有言者不必有徳と學者を警むる所以の者深し安んぞ言を以て一科と爲すの事あらんその政事を論ずるは則ち曰く爲政以德と子路の政を問ふに告ぐれば則ち曰く先之勞之と益を請ふ曰く無倦と又國を爲むるに禮を以てするを言ふて而してその讓らざるを晒ふ子路の事前に出づ山求は賦を治め宰と爲るの才ありと雖も而れども終に其仁を許さず又嘗てその貝臣たるを責め而して季子然に告げて曰く大臣以道事君不可則止と是れ皆之を德行に引くなり安んぞ専ら政事を以て一科と爲すの事あらん四教に至りては文を以て首と爲すと雖ども然れども重きを歸するは行忠信に在り弟子に教へて曰く行有餘力則以學文と博學於文は正に約之以禮を要せんが爲めなり又曰く文莫吾猶人也躬行君子則吾未之有得と子夏は文學なり而れども嘗て之を警めて曰く汝爲君子儒無爲小人儒と子游孝を問ふ子曰く今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎と益し養は孝の文なり敬は孝の徳なり亦皆之を德行に引く所以なり豈に文學を以て一科と爲すあらんや是れに據りて而して言へば德行言語政事文學は乃ち記者當時諸弟子の長ずる所の者に就きて而して言ふ或は問ふ何を以て其門人

の記する所たるを知る、曰く凡そ名を稱ふる者夫子の辭に非れば弟子が師前相ひ
 謂ふの辭なり字を稱する者弟子自ら謂ひ謂ふの辭に非れば弟子の門人の辭なり
 是れ魯論の例なり後人これを四科と謂ふ亦不當と爲さずと雖とも其實は聖人當
 日四科を以て教を設けたるに非るなり聖門には言語政事文學皆必ず德行あり以
 て之れが本と爲る德行は本なり言語政事文學は末なり德行は本なり言行政事文
 學は用なり本あれば必ず末あり本あれば必ず用あり此れ德行の貴ぶべき所以な
 り其或は才質首語政事文學に近き者は則ち必ず末よりして而して深く其本を探
 り用よりして而して實に其本を求む是れは則ち聖人の教なり然れどもその門人
 の四科を記するを觀て而して十子の長ずる所と夫子が人才を造就するの盛んな
 ると並に見れり

子以四教文行忠信とは論語の記者が聖人の教を括盡したる語なり言ふは夫子人
 を教ふる其大端は文と行と忠と信となりと此四者は高下皆宜しく彼此各々遠し
 賢智者以て俯して而して就くべく愚不肖者以て仰ぎて而して及ぶべし故に之を
 躰すれば皆下學の功あり之に進めば皆上達の妙あり蓋し文とは先王の遺文にし

て道の寓する所なり行とは踐履の謂にして夫の道を躰する所以なり己れを盡す
 之を忠と謂ひ實を以てする之を信と謂ふ忠信二字の解は伊川に従ふ己れを盡す
 は心のまことをつくすなり實を以てするは物こと相違なきなり忠信二者は亦是
 れ百行の一なりと雖とも然れども凡そ事は此れを以て主と爲さざれば則ち以て
 之が地を爲すなし猶ほ室を爲くりて而して基址なきがときなり故に別ちて而
 して之を言ふ文行は相ひ須ちて而して先後あり行忠信も亦相ひ須ちて先後を分
 つべからず故に程子之を釋して曰く教人以學文脩行而存忠信也忠信本也と朱子
 も亦云く其初須是講學講學既明而後脩於行所行雖善然更須反之於心無一毫不實
 處乃是忠信也又云く文便是窮理豈可不見之於行然既行矣又恐行之有未誠實故又
 教之以忠信也所以伊川言以忠信爲本蓋非忠信則所行不成故耳とこの三説尤も明
 白的切なり更に之れを細釋すれば行は身上に就きて説き忠信は心上に就きて説
 き而して表裏の別あり忠は己れの上に就きて看信は事物の上に就きて看る如し
 孝ならんと欲し弟ならんと欲し心盡さざるなければ是れ忠孝を行ひ弟を行ひ事
 實ならざるなきは是れ信忠と信とは二にして而して一なり故に程子合言す一に

して而して二なり故に列して四教と爲る教ふるに文を學び行を脩むるを以てするは知行當に俱に盡すべきなり教ふるに忠信を存するを以てするは表裏當に俱に實なるべきなり且つ文行忠信は先後の序ありと雖も然れども文を學び行を脩むる時之に忠信を存するを教へざるに非るなり但だ博く文に學ばざれば則ち以て其理を講明するなし如何んぞ行ひ去らん然れども忠信なければ則ち行ふ所の者皆虛にして而して講習する者も亦徒然のみ故に程子曰く忠信は本也と忠信を盡す時に到り得て益々博文を好みて而して行ふ所皆實なり文を學び行を脩むる時之に忠信を存するを教へざるに非す亦既に忠信を存する後文を學び行を脩むるを用ゐざるに非るなり故に朱子謂ふ是表裏互説在這裏と又主忠信と文行忠信の忠信とは學を以て言ふ必有忠信如某者の忠信は質を以て言ふ自ら淺深の別あり或は問ふ此章は是れ文を先にして而して行を後にす行有餘力則以學文は是れ行を先にして而して文を後にす何を以て同じからざる朱子曰く文行忠信は是れ外より做して内に向ふ則以學文は是れ内より做して外に向ふ聖人此類を言ふ者多し人の處を逐ふて自ら職らんことを要すと眞西山曰く行有餘力則以學文是

れ力行を以て先と爲す子以四教文行忠信と文は講學の事知を主とす忠信は脩身の事行を主とす此れ又知を以て先と爲す此二章實に相ひ表裏す正に當に合はせて而して之を觀るべし大抵致知力行の二者は一を闕くべからず既に其理を知れば其事を行はざるべからず既に其事を行へば其理を知らざるべからず二者並に進めば則ち爲學の功至れりと呂晚村曰く此れ雅言の章と皆門人習ひ久しく共に悟りて而して其大要を擧ぐると此の如し亦門人身心の得る所耳目の有する所聖人固より未だ嘗て此の條規課程を立てざるなりと文行忠信は固より條規課程に非ず然れども常に此れを以て人を教ふれば殆んど亦條規課程の如く然り

東涯伊藤氏曰く夫子道德學問の規模節目論語の書につくせり當時弟子夫子平生教法の條目を括りて文行忠信の四箇條に分つ是は夫子の言にあらざれども當時高第の弟子夫子のあしへをよく心得たる人其綱要を括りてかくのごとく立られたるによりてこれを論語にのせて夫子の言と同じく信用されるべし文といふは先王の遺文書物をよむことなり後世には著述を文章といふも是は秦漢よりこのかたのことにて古人の文といふは或は禮樂をい

ひ或は書物をいふこの文といふは専ら書物のことなり博學於文、行有餘力、則以學文といふいづれも同じきことなりいにしへ聖賢の言行を考へ是非善惡のある所をしらずしてだゞ己が心にまかせて行ふときは道にそむき事をあやまることあるゆへに夫子の教先づ文を學ぶを第一とす行といふは五常百行、仁に居り義に由り孝弟信忠をおさむる等の類皆行なり忠と云ふは人に對して離末なく人のことをなすこと己が事をなすがことく大切にすることなり信といふは人に對して物こと相違なく何事も眞實にして偽飾なきをいふ畢竟忠信の二字おしまはしていへは今時の人の律義なることなり此三つも百行の中なれども下地律義になければ何程見事なる行あるともいつはりかさりになりて眞實にあらざる故に是を二箇條にたて、文行忠信といふ人といふものは位に貴賤上下の別あり才に智愚賢不肖の差ありて治國平天下の道は士庶人の通じてしるべき事にあらず中人以上のしるべき事は庸衆人のよく辭ふべきにあらずたゞこの文行忠信の四つのは上下のへだてなく賢愚のわかちなく通じて覺悟すべきことにて徳をなし才を達し賢人君子の

(七六)

域にいたるとてもまたこの中より熟しすむことなれば夫子の教を括りて文行忠信とたて給ふまことにことばなりなり
 夫子罕に言ふ所の者あり常に言ふ所の者あり論語に門人その常に言ふ所の者を記して曰く子所雅言詩書執禮皆雅言也雅は正なりたゞ正以て常と爲すべし故に雅も亦常と訓す執は守の意なり言ふは夫子教を設くる人に因りて而して施す固より亦言はざる所なし而して更に常に言ふ所の者あり常に言ふは維れ何んぞ詩なり書なり執禮なり皆その常に言ふ所の者なりと蓋し詩の教たる以て性情を養ふべく書の教たる以て政事を考ふべく禮の教たる以て節文を謹むべし是三者は皆日用身に切なるの具なり禮に獨り執と言ひし者は人の執守する所を以て言ふ詩書は惟誦讀を假りて然る後能く其義を知りて而して之を用に達す禮は即ち全く人の執守して而して之を行ふに在り故に禮に獨り執と言ひしなり首に子所雅言と云ひ末に皆雅言也と云ふ首句は是れ指點の語末句は是れ理會の語否れば則ち復説と爲る記者指數の神情唱嘆盡きす都べて所の字皆の字也の字に在りて之を得是れ前に夫子學易の語あるに因りて而して之を類記せしなり古者載籍詳

(七七)

かならず國に大事あれば則ち始末を具へて而して之を記しこれを後世に貽す其
 味、典、謨、訓、誥の別あり之を名けて書と曰ふ宗廟朝廷に樂章あり閭里の間に歌謠あ
 り采りて而して之を輯め以て風詠に供す其義に風賦比興雅頌の異あり之を名け
 て詩と曰ふ書は固より四代聖王天下を治むるの大經大法帝王臣民の奉承して遵
 守する所の者なり此れを讀まざれば則ち以て人道の本づく所政治の由る所に達
 する能はず詩は則ち人の思ふ所之を言に陳べ風俗の盛衰人情の險夷以て節物氣
 候の變鳥獸草木の名に至るまで具に備はらざるなし此れを讀まざれば則ち世に
 處し人に接して以て之れと言ふ能はず故に古の儒たる者は只是れ詩書禮樂を習
 ふ執禮と言へば則ち樂は其中に在り夫子の時六經未だ備はらず單に文と謂ふ者
 は大抵詩書六藝なり易と春秋とに至りては夫子自ら謂ふ加我數年卒以學易と又
 曰く春秋天子之事と一は理蘊を説き一は事變を紀す共に初學に施すべきに非ず
 且つ夫子は曾て學者に易を看んとを教へず蓋し易は是れ箇の極めて理會し難き
 底の物事他書の比に非ず且らく先づ詩書禮を讀むの却て緊要なるに如かず然れ
 ども若し精しく之を言へば詩書執禮は是れ其當然の理を明かす易は是れ其所以

然の理を明かす其實は一理なり今人多く易と春秋とを扯きて來り伴ひ且つ謂ふ
 詩書禮を言ふて而して易と春秋との理も亦その中に備はると此れは都べて是れ
 閒話朱子謂ふ易掌於太卜春秋掌於史官學者兼通之不是正業と所謂不是正業は只
 是れ常業ならざるなり易の書たるが如き之に精にすれば便ち天地の道を備ふ人
 の知り易き所に非ず之を淺にすれば只是れ卜筮の用のみ學者日用常行自ら許多
 事理の眼前に在るあり如何ぞ他を以て常業と爲さん春秋は以て世變を知るべし
 と雖も然れ共未だ聖人の筆削を経ず勸懲の義尙ほ未だ昭然たらず日常間道の世
 變を知らんと要する是れ學者己れに切なるの事に非ず故に亦常業に非ず只兼ね
 て之に通ずるのみ此の如く見て方に雅の字と意會すべし本文畢竟所の字皆の字
 を看んとを要す門人は是れ親炙熟服の久き纔に詩書禮の上に於て尋味し便ち聖教
 に親切の處あるを見得し纔に聖教の上に於て理會し愈々詩書禮の人を益するを
 見得せしなり所の字皆の字當に此の如く看るべし是れ聖人が此れを以て教を立
 てしならず亦是れ偶然道ひ及びしならず全く是れ記者親炙習傳日久しく聖言大
 都此れを離れざるを覺得せしなり雅の字の情景義旨方に是の如し夫子日にこの

三經を提げて課程と爲したるに非るなり

東涯伊藤氏曰く古より詩書並べ稱して而して夫子詩を言ふの語最も詳なり魯論に載する者凡そ五章子曰小子何莫學夫詩詩可以興可以觀可以群可以怨通之事父遠之事君多識於鳥獸艸木之名又曰誦詩三百授之以政不達使於四方不能專對雖多亦奚以爲又曰詩三百一言以蔽之曰思無邪又曰人而不爲周南召南其猶正而葩而立敷又曰不學詩無以言今夫子詩を説く諸語を玩ぶに大抵人情に通じ世態を諳んじ以て人と交はるを言ふ則ち以て君に事ふべく以て父に事ふべし以て之に授くるに政を以てすべく以て四方に使して而して專對すべし興觀羣怨各々感ずる所あり然らば則ち詩以道人情その言莊子に出づと雖とも而れとも此一語も亦三百篇の主旨を括るに足れり大抵詩の經たる語孟と同からず語孟の二書は諸侯大夫及び門人弟子の爲に是非を甄別し其趨舍を明にし耳提面命する教に非るはなきなり詩は則ち然らず欣感悲歡各々抒ぶると衷よりす之を聲音に施し四方を風動す故に曰く詩言志歌永言聲依永律和聲是に知る時は本と人を教ふるの書に非ずして而して人情を躡

貼して以て人に交るとを此れ詩の教たる所以なり

又曰く古者詩三千餘篇孔子に至りて其重なるを去り禮義に施すべき者三百五篇を取ると其言始めて史記世家に見はれて而して後世學者の信を取る所なり然れとも夫子の言を觀るに樂正雅頌各得其所と曰ふのみ蓋し謂ふ當時淫哇盛んに行はれ雅頌叙を失ふ故に夫子衛より魯に歸り參伍修定して以て其舊に復するのみ未だ三千を刪りて而して之を三百にするを言はざるなり且つ春秋内外傳に載する所列國士大夫の詩を賦するを觀るに率ね皆今の三百篇の時にして而かも闕けて逸詩と爲る者甚だ希れなり而して夫子も亦屢ば三百篇と言へば則ち夫子以前詩の存する者亦此數の者に過ぎざるを知る假りに夫子をして自ら刪らしめば豈に執りて以て稱と爲すべけんや此れ亦知らざるべからず清の汪堯峰孔子未嘗刪詩説あり畧ほ東涯が此論と同じ夫子の罕に言ふ所の者は利と命と仁となり論語に云く子罕言利與命與仁とこの罕言は不語無言と同からず不語無言は箇の教旨の在るあり罕言は只是れ記者が傍觀して此數者夫子之を言ふと甚だ少きを見得し便ち之を類記す兩の與の字は

乃ち記者指數の詞三件類記して而かも不倫なり故に兩の與の字を著けて之を聯屬す同一の罕にして而して罕なる所以の故は正に各々同からず程朱二子之を註すると甚だ明かなり程子曰く計利則害義命之理微仁之道大皆夫子所罕言也と計利則害義は計の字を看んとを要す聖人罕に言ふは只是れ利に計較し到らんことを恐るゝのみ不利の處に就くを要すと謂ふには非るなり命之理微は此理微なれば則ち窮通得喪も亦隠にして而して知り難し窮得通喪の數を以てするも亦天命の初め生と俱に賦する者なり別に一箇の事物あるに非ず仁之道大も亦是れ至大盡し難きを説くならず故に罕に之を言ふ但だ道既に至大なれば則ち囫圇に説き了はるは無益なり人便ち著實に工夫を做すを肯んぜず若し以て大と爲して而して故らに秘すれば則ち人の仁に従事せざらんを欲するなり而して可ならんや又曰く子罕言利非使人去利而就害也蓋人不当以利爲心易曰利者義之和以義而制利斯可矣罕言仁者以其道大也と朱子曰く罕言は是れ言はざるならず又多言すべからず特だ罕に之を言ふのみ罕に利を言ふ者は蓋し凡そ事を做すに只這の道理に循ひて做せば利自ら其中に在り利涉大川利用行師の如き聖人豈に利を言はざらん

や但だ罕に言ふ所以の者正に恐る人之を求むれば則ち義を害せんことを罕に命を言ふ者は凡そ吉凶禍福皆是れ命若し儘ま命を言へば恐らくは人之を命に委して而して人事廢せんことを所以に罕れに言ふ罕れに仁を言ふ者は恐らくは人輕易に看了して切己上に工夫を做すを知らざらんを然れども聖人若し言はざれば則ち人又如何なる是れ利如何なる是れ命如何なる是れ仁を理會し得ず故に言はざるべからず但だ利を言はんと雖ども而れども言ふ所の者は利に非るはなし命を言はずと雖ども而れども言ふ所の者は命に非るはなし仁を言はずと雖ども而れども言ふ所の者は仁に非るはなしと又曰く利は義の和なり惟義に合へば則ち利自ら至る若し多く前を言へば則ち人義を知らざして而して反て利を害せん命は天の令なり然れども人當に己を修め以て之を俟つべし然る後に以て命を立つべし若し多く命を言はば則ち人事修まらずして而して反て命を害せん仁は性の徳なり然れども必ず忠信篤敬克己復禮然る後に能く至る若し多く仁を言はば則ち學者虚に憑り等を躐へて而して反て仁を害せん三者皆理の正聖人言はざる能はざる能はざる所而れどもその憂ひ深く慮り違ければ則ち又以て多言すべからざる

なり故に罕れに言ふのみと今程朱二子の言を括約して夫子の罕に言ふ所以を説かんに當に左の如くなるべし曰く利は元と不好の物に非ず然れども公私の別あり又公利と雖ども偏に利心を主とするときは動もすれば計較を作して義を害するあり命の説は甚だ明かにし難し深く之を言はば初學の解し得る所に非ず淺く之を言はば俗人輕しく之を信じて自ら勉行せざるを恐る仁の理は至つて大なり之を説く鄭重ならざるべからず之を行ふ者に於ても亦等級の不同と才質の高下とあり能く此に慮らずして數々之を言ふときは惟人をして等を躐へしむるのみならず亦人をして之を玩ぶの心あらしめん故にこの三者は夫子の罕れに言ふ所以なり若し然らずんば夫子論語に於て仁を言ふ者一再見に止らず易六十四卦は皆利を言ひ又尤も性命の原を詳にせり此れ何んぞや乃ち知る罕れに言ふ者は夫子の人に教ふる親切なる處にして門人その平日の見る所に就きて而して之を類記せし者なるを

夫子の人を教ゆる曷んぞ嘗て隠す所あらんや而れども亦語らざる所の者あり其一を怪と曰ふ怪は則ち詭異不經人の聽聞を惑はす其一を力と曰ふ力は則ち強を

恃み勝を好み義理を顧みず其一を亂と曰ふ亂は名を干し分を犯し人倫の大變たり其一を神と曰ふ神は幽遠測り難し日用の切ならざる處たりこの四者は或は理の正きに非ず或は理の常に非ず之を言ふ者に在りては或は以て一時の聽聞を快くするに足り而して之を信ずる者必ず人の心術を壞るに足る夫子の敢て語らざる者其意深いかな論語の記者之を記して曰く子不語怪力亂神と是れなり朱子之を釋して曰く怪異勇力悖亂之事非理之正固聖人所不語鬼神造化之迹雖非不正然非窮理之至有未易明者故亦不輕以語人也と説者曰く答述するを語と曰ひ自ら言ふを言と曰ふ茲に言と曰はずして而して語と曰ひし者は蓋し人言ひ及ぶと雖ども己れ亦答へざるなり故に本註一は則ち聖人所不語と曰ひ二は則ち不輕以語人と曰ふと此説甚だ道理あり蓋し人既に怪を言へば便ち是れ好異の心腸人既に力を言へば便ち是れ争鬭の心腸人既に亂を言へば便ち是れ悖逆の心腸人既に神を言へば便ち是れ迷惑の心腸或は門人實に其事を擧げて以て夫子に問ふて而して夫子も亦之を答述せざるなり本註に怪異勇力悖亂之事一の事の字を下し鬼神造化之迹一の迹の字を下す大に深意あり怪とは山精水妖天地變異の類力とは鳥獲

の能く千鈞を擧げ孟賁の生きながら牛角を抜き孟賁の鼎を扛ぐか如き是れなり
 悖亂とは臣その君を弑し子その父を弑する如きの類なり鬼神とは日月星辰の升
 降する所以風雨霜露の慘舒する所以四時の代序する所以万物の榮枯する所以の
 者是れなり夫れ怪を語れば則ち人の惑ひを啓く力を語れば則ち人の争ひを啓く
 亂を語れば則ち人の悖理逆倫の事を啓く神を語れば則ち人を啓きて以て心を測
 知すべからざるの境に馳せしむ是故に聖人之を謹むなり茲に二三の例を示せば
 孔文子大叔疾を攻めんと欲し仲尼に問ふ仲尼對へず此れ亂を語らざるなり子路
 鬼神に事へんとを問ふ子曰く未能事人焉能事鬼と此れ神を語らざるなり子路を
 斥けて曰く暴虎馮河死而無悔と其の力を語らざるを知るべし魯論二十篇記する
 所に嘉言善行多し獨り一語の異に渉る者なし且つ曰く索隱行怪吾弗爲之と則ち
 その怪を語らざるを知るなり南軒張氏曰く聖人一語一默の間教あらざるはなし
 怪を語れば則ち常を亂り力を語れば則ち徳を妨げ亂を語れば則ち志を損し神を
 語れば則ち聽を惑はす故に聖人の言未だ嘗て此に及ばず然れどもこの四者の中
 に就て鬼神の情狀は聖人も亦豈に之を言はざらんや特だ其理を明かにし人をし

て之を心に求めしむるのみ其事の如きは未だ嘗て之を言はざるなりと或人朱子
 に問ふ孔子春秋に於て災變戰伐篡弑の事を記す易禮に於て鬼神を論ずる者尤も
 詳なり今四者を語らざるは何んぞや朱子曰く聖人平日の常言蓋し是れに及ばず
 その已むを得ずして之に及ぶときは則ち三者に於て必ず訓戒あり神に於ては則
 ち其理を論して以て當世の惑を曉とす世人の徒らに語りて而して反て以て人を
 惑はす若きに非るなり然れどもその之に及ぶや亦鮮しと陳氏も亦云く春秋は經
 世の大法亂臣賊子を懼れしむる所以當に實を以て書すべし論語は講學の格言天
 典民彝を正くする所以故に語らざる所なりと此れに由りて之を觀ればこの四者
 は聖人平日の語らざる所と雖も未だ嘗て擧げて以て人に示し我が語らざる者
 は此に在りと曰はざりしなり然れども大抵怪誕不經の者は必ず専ら詐力の特み
 て以て邪謀を濟し上を犯し亂を作す者は多く言を鬼神に托して以て愚衆を惑は
 す此れ聖人言を謹みて以て世防を立つる所以なり嗟乎夫子雅に言ふ所は詩書執
 禮罕れに言ふ所は利と命と仁と語らざる所は怪力亂神雅に言ふ罕れに言ふ語ら
 ず教に非るは莫きなり

夫子の平日人に教ゆる者は文行忠信を主とし雅に言ふ所は詩書執禮なると前已に之を述べたり然れどもその獨り道理を研究するに於ては亦敢て自ら卑近に安んせざるなり又人を引きて高處に進ましむるの意あり此れその易を贊するを見て而して知るべし子曰加我數年五十以學易可以無大過矣と集註に云くこの章の言史記には假我數年若是我於易則彬彬矣に作れり加は正に假に作り而して五十の字なし蓋し是時孔子已に幾んど七十なり五十の字誤りしと疑ひなしと又劉聘君の話を擧げて他の論語に五十は卒に作るゝあるを言へり今皆之に従ふ言ふは古聖人の易を制するや天道是に於て乎昭かに人事是に於て乎備はる廣大精微民に先たち用を利するの書なり我れ心を留め力を用ゐると久し若し天我れに數年を假しその易を學ぶの功を竟へ或は其象を觀て而して其辭を玩び或は其變を觀て而して其占を玩ぶを得せしめば則ち吉凶消息の理明かに進退存亡の道得て一動一靜未だ必ずしも全然過ちなからずと雖ども其れ亦以て大過なかるべしと加我數年と謂ふあるは書と作して解せず須らく工夫を以て説くべし下に卒字あるを看來れば則ち是れ聖人深く其年の老ひて而して學易の功を終はる能はざるを

人深く易道の窮りなきを見るのみ是れを言ふを以て人に教ゆるは却て是其餘意なり宋子之を註して曰く學易則明乎吉凶消長之理進退存亡之道故可以無大過蓋聖人深見易道之無窮而言此以教人使知其不可學不而又不可以易而學也この吉凶消長は天道を以て言ひ進退存亡は人事を以て言ふ聖人の易を作りしは天道に即きて以て人事を決するに過ぎず然れどもその蘊する所の理に至りては甚だ深遠なり故に聖人の謙辭する所以の者は是れ自ら以て聖と爲して而して謙に意あるに非ず蓋し亦眞に易道の窮りなきを見て俛焉孳々の意あり又因て以て人に教へ人をして易道の以て學ばざるべからざるを知らしめしなり易の占辭吉凶悔吝の外に於て屢ば無咎を別て之を言ふ大要只人の過ちなからんとを欲す故に夫子も亦曰はく無咎者補過也と悔ゆれば則ち過能く改まりて而して吉に至る吝なれば則ち過能く改まらずして而して吝に至る人々をして皆易を學ぶとを知らしむして曰く易は須らく錯綜すべし天下甚麼の事を看るに一として此れより出で

るなし善惡是非得失以て屈伸消長盛衰に至るまで是れ甚事と看るに都べて此れより出づ伏羲以前は如何に吉凶禍福を占考せしを知らず伏羲に至り陰陽兩箇を以て卦を畫して以て人に示し人をして此れに於て吉凶禍福を占考せしめたり一畫を陽と爲し二畫を陰と爲し一畫を奇と爲し二畫を耦と爲し遂に八卦と爲し又錯綜して六十四卦と爲す凡そ三百八十四爻文王又之れが象象を爲くり以て其義を釋す陰陽消長盛衰伸屈の理に非るはなし聖人の學ぶ所以の者は此れを學ぶのみ乾卦一卦を把りて看よ乾元亨利貞の如き人が事を做さんと要し若し乾卦を占ひ得れば乾は是れ純陽元は大なり亨は通なりその事たる必ず大に通ず然れども而して大亨を説くと雖とも若し爲す所の事正道に合はざれば則ち亦その亨を得ず故に大亨と云ふと雖も而れども又正に利あるなり卦内六爻都べて是れ此の如し潜龍勿用を説くが如きは是れ自家未だ當に出作すべからざるの時須らく是れ潜晦すべくして方に始めて咎なし若し此に於て而して潜晦する能はざれば必ず須らく咎あるべし又上九に亢龍有悔と云ふ若し此爻を占ひ得れば必ず須らく亢滿を以て戒を爲すべし遑般の處の如きは最も是れ易の大義易の書たる大抵盛滿の

時に於て戒を致す蓋し陽氣正に長む必ず消退の漸あり自ら是れ理勢此の如しと又曰他經の如きは先づ其事に因りて方に其文あり書に堯舜禹成湯伊尹武王周公の事を言ふ因て許多の事業あり方に那裡に説き到るなり若し那事なければ亦那裡に説き到らず易は則ち是れ箇の空底の物事未だ是事にあらず豫め先づ是理を説く故に許多の道理を包括し得盡す看よ人甚事を做すも皆撞著するをど又過の字を釋きて曰く所謂大過は常に潜まるべくして而して潜らず常に見はるべくして而して見はれず常に飛ぶべくして而して飛ばざるが如き皆是れ過なり又曰く乾の一卦は陽に純なり固より是れ好し元亨利貞の如きは蓋し大亨の中又須らく利は正に在るを知るべし正に非れば則ち過なりと又曰く坤の初六の如きは須らく霜を履む堅氷の漸あるを知るべし人の恐懼修省せんを要す恐懼修省を知らざれば便ち是れ過なりと然れども已上引く所の朱子の言は頼りて以て論語に於ける朱子が贊易の語を詳解したるに止まるのみ夫子易理を研究するの深き著はれて廣大精微の理論と爲る者は繫辭傳説卦文言あり此れは則ち平日門人と語る者に非ずして而して實に萬世に垂示せし者なり常に別に之を論ずべし

西山真氏曰く聖人易を作る陰陽消息の理を推明するに過ぎざるのみ陽長ずれば則ち陰消し陰長すれば則ち陽消す一消一長は天の理なり人にして而して易を學べば即ち吉凶消長の理を知らん陰陽を以て對言すれば則ち陽を善と爲し吉と爲し陰を惡と爲し凶と爲す獨り陽を言へば則ち陽に自ら吉あり凶あり蓋し陽中を得れば則ち吉なり中ならざれば則ち凶なり陰も亦然り天理を以て言へば則ち消息盈虛と爲り人事を以て言へば則ち存亡進退と爲る蓋し消すれば則ち虚し長すれば則ち盈つ日中すれば則ち昃き月盈つれば則ち虧き景極まれば則ち寒く寒極まれば則ち暑きが如し此れ天道の已む能はざる所なり人能く此れを躰すれば則ち常に進むべくして而して進み常に退くべくして而して退き常に存すべくして而して存し常に亡すべくして而して亡す此の如くなれば則ち人道得て而して天と合す故に孔子以て進むべければ則ち進み以て退くべければ則ち退き以て久ふすべければ則ち久ふし以て速にすべければ則ち速にす之を用ゆれば則ち行ひ之を舍つれば則ち藏す此れ孔子の身全躰皆易なり按ずるに夫子は時中せしのみ易の理は只是れ時の字なり稍時に合はざれば則ち過つ然れも時は中を離れず若し中にして而して正ならず正にして而して中ならざれば都べて中と説き得ざるなり

夫子曰く性相近也習相遠也と轉關の要害は己れに在りては一の學の字喫緊なり君父師友に在りては一の教の字喫緊なり故に大學論語の開首には一の學を道ひ中庸の開首には一の教の字を道ふ教は道を明かにするを以て主と爲し學は道を求むるを以て主と爲す此道は人に具はる人の本心は外物に非るなり天子より乞巧に至るまで人として求むべからざるはなく朝廷より以て賦畝に至るまで地として求むべからざるはなく現在より以て修身に至るまで時として求むべからざるはなし權勢を藉らず地位を論せず等待を須たず人爲を資せず故に曰く率性之謂道と又曰く不可須臾離と又曰ふ道不遠人と彼の篤信に學を好むを肯んせざる者は豈に自棄自絶に非すや世人恒に謂ふ吾れ聖賢に非ず安んぞ聖賢の道を以て我れを責むべけんとは是れ自輕の説なり豈に聖賢には四端あり五倫ありて己れには四端五倫なからんや聖賢と此官骸を同ふし聖賢と此心性を同ふし聖賢と此倫理を同ふし乃ち聖賢と此學業を同ふせず自棄孰れか焉より甚だしからん孟子謂

ふ逸居無教則近於禽獸と嗟乎逸居する者豈に但だ禽獸に近きのみならんや禽獸の天に得る者は本と備にして而して全からず又人の食を食ひ人の衣を衣人の居に居らず流浪生死するも猶ほ之れ可なり人は即ち天地に受くる者已に物に同じからず而して服食居處一切又大に禽獸に遠ざかる乃ち力を學に致さずして徳業聞ゆることなくんば禽獸に對して而して愧色あらざる乎抑も土の農工商賈に重ぜらるゝ所以の者は詩書を読み禮義を守り達しては以て君に致し民を澤し窮しでは以て徳に居り俗を善くし農工商賈皆託庇せらるゝを以てのみ若し士たる者務めて道を明かにし義を守らんとを求めず惟だ浮文末技を習ひて以て富貴を取り達すれば即ち身を肥やし家を保ち君を欺き民を害し窮すれば即ち天を怨み人を尤め流に同ふし汙に合す是れ遠く農工商賈の胼手胝足質撲勤儉世に實用あるに如かざるなり秦漢の後學者多く學は是れ以事に學ぶを知らず朱子論語集注首章に曰く人性皆善而覺有先後後覺者必效先覺之所爲乃可以明善而復其初と論語開章第一義に於て學の旨を發明する明善復初に在り若し學は明善復初たるを知らざれば皆俗學なり性善は孟子より之を發すと云ふと雖も實は則ち古聖賢より

皆之を言へり堯典に峻徳と曰ひ湯誥に惟皇上帝降衷於下民若有恒性と曰ひ大甲に明命と曰ひ大學に明德と曰ひ中庸に天命之謂性率性之謂道と曰ふ此旨に非るはなし人性皆善而覺有先後の二語宜しく玩ぶべし覺とは此性善の理を覺るを謂ふなり佛氏も亦覺を誑く然とも性善の理を明かにせずして而して但だ靈覺を以て性體と爲す差ふ所以なり此れは是れ儒釋が本體を言ふ分界の處又後覺者必効先覺之所爲乃可以明善而復其初と曰ふ三語尤も宜しく玩ぶべし必ず先覺の爲す所に効ふて工夫方に實落あり陽明深く効先覺之所爲の一語を喜ばす此れは是れ程朱か陸王と工夫を論ずる分界の處蓋し人性皆善は理同きなり覺有先後は氣異なるなり性は是れ心が具ふる所の理理は氣を離れず而して氣に離らず故に善ならざるなし覺は是れ心の精靈氣に發して而して氣に固せらるゝを脱れず故に氣質清明なる者は能く先づ覺る氣質昏濁なる者は致知力行の功を極むるに非れば變化する能はず必ず先覺の爲す所に効ふて而る後に以て善を明かにして而して其初めに復るべし所謂後覺の者なり先覺之所爲とは即ち凡そ堯舜以來相傳の心法治法と孔孟が發明する所の爲學の要道と皆是れ之に効ひ然る後に階級の循

ふべきあり若し師心自ら用れば何んぞ能く道に入らんや古注に學の字を解して經業を誦習すと爲すは集註に如かざると遠し學の字包む所甚だ廣しと雖も夫子の所謂學は其功最も身心に切なる者を指して言ふと明かなり集註に程子及び謝氏の三條を引きしを玩べば學は知行を兼ねたると見るべし學は知行を兼ねて工夫方に偏ならず後世學を論ずる者或は單に致知を提げ或は單に力行を提ぐ皆流弊あるなり人若し朱子の解が果して夫子の意に乖かざるを知らんと欲せば夫子が博文約禮の語を見るより瞭かなるはなし

二洲尾藤氏曰く致知とは吾が知識を推し極むるなり知識とは凡そ人みな幼より自然と父母を親み兄長を敬ふとを知らる類なり其知らる所を推し極めて親むべく敬ふべき道をますく精くするを致知といふ然るに致知在格物とて致知の學は物に格るを務むるとなり物とは事なり人の行ふ所の事なり事の大綱二つあり一に脩己といふ己は身なり身は耳目鼻口四支百骸を該ぬ耳には聴くの事あり目には視るの事あり鼻の題き口の言ひ四支百骸の坐作運動皆事なり二に理人といふ人は家國天下を該ぬ家には諸父昆弟妻子より

宗族婚姻僕従の類に至るまで皆これを處するの事あり國には百官を帥る萬民を育ひ徳教を敷き政令を施す等の事あり天下には諸侯を懷け四夷を撫で制度を立て禮文を考ふる等の事あり是れ己を修め人を理むるの大略なり他は叙でをもて推して知るべし且つ居處の高卑によりて事の大小は様々なれども人の生れて世にある者はすべて事なきの時はなし事あれば則ちあり物に格るとはこの事の則を明かにして其極處に至るなり然るにこの則は公正の理なれば私心をもて知るべきにあらず必ず書を讀み古を替へ一々に精究して後に明かにするとを得べしその方は博く學び審に問ひ慎みて思ひ明かに辨ふといへりかく細密に力を用ゐて怠らざ久しくすれば自然と吾が知識推し極め盡して天下の理通せざるとなきに至る是れ所謂物格知至なり力行とは強めて善をなして怠らざるなり致知の功によりて行ふべきの道既に明かならばその道に循ひて力め行ふべし身を修むるよりして家國天下を理むる上まで力行の地に非るはなし居處は莊敬を務め言行は信義を務め祖先を祭り尊長に事へ幼を慈み孤を恤み男女の別長幼の序一家の雍睦宗族の和協よ

り推して國に及ぼし又天下に及ぼし臣を使ひ民を安んじ近きを擾げ遠きを
 撫るに至るまで凡そ其身の關り係るほどのとは皆力を盡さずといふとなか
 るべし然るにその要領を知りて勉めざれば爲ると汎然として成し得るとな
 し要領は大學誠意の傳に毋自欺慎其獨といへる是れなり毋自欺とは己に惡
 を去りて善を爲るの義たるを知らば眞實に力を用ゐて其知れる心を自ら
 欺くべからざるなり慎獨とは他人知らずして己れ獨り知れる處に慎みを加
 へてその實なると實ならざるを察するなり小事大事皆かく省察して行は
 ざれば日用の間覺へず自ら利するの私に墮ちて義理の正きを失ふとある故
 かく其源を濶へて流の濁りなからんとを欲するなり是れ細密なる工夫なれ
 どもまた別に微妙にして言ひかたき意旨あるには非ず皆事を處し物に接す
 る上に就てこの省察を用るなり畢竟外を方にせんとすれば先づ其内を直く
 し内外一致にして巧言令色して人に悦ばるゝの類に至らしめざる教なり謬
 り解して坐禪入定の類とし徒に無物の地を照さんとを思ふべからずすべて
 力行は實心をもて正路を踐むとを務むもし其心實ならざれば作し得て好き
 も詭遇して禽を獲るにて眞の事業に非ず聖門にては深く羞むるとなり行跡

の眞偽王霸の分脈みな此處によれり吾人自ら省みて自ら強めざるべけんや
 夫子曰く君子博學於文約之以禮亦可以弗畔矣哉是れ夫子人に教ふるに知行兼
 ね盡すの功を以てするなり是非を分け邪正を辨ふるを致知といふ是れ即ち博文
 なり是なる者正なる者に順ひて行ふを力行といふ是れ即ち約禮なりこの博文約
 禮は是れ兩件の工夫却て是れ一貫の道理朱子曰く君子學欲其博故於文無不考守
 欲其要故其動必以禮如此則可以不背於道矣と又曰く博文所以驗諸事約禮所以躡
 諸身如此用工則博者可以擇中而居之不偏約者非以應物而動皆有則と胡敬齋曰く
 博文是讀書窮理事不如此無以明諸心約禮是操持力行事不如此無以有諸已とこの
 三文最も夫子の意を得たり朱子又之を細説して曰く博學於文は考究の時自らは
 れ頭項多し行ふ時に到り得て却て只是れ一句約たる所以なり若し博く學ひて而
 して之れを約するに禮を以てせざれば安んぞ道に畔かざるを知らん徒らに要約
 を知りて而して博く學ばざれば則ち所謂約なる者未だ是と不是とを知らず亦た
 或は道に畔かざる能はざるなり又曰く博文は條項多し事々理會し著け去る禮は

却て只た是れ一箇の道理、視るも也、是れ道箇禮、言ふも也、是れ道箇禮、動くも亦是れ道箇禮、若し博文にして而して之を約するに禮を以てせざれば便ち是れ歸宿する處なけん書を讀み時を讀み易を學び春秋を學ぶが如き各々自ら一箇の頭緒あり若し只許多の條目上に工夫を做せば自家身已に都べて歸著なく便ち是れ道に離畔するなりと此れを讀めば則ち意義益々瞭然たらん夫れ文に博からざれば則ち融會貫通して而して灼かに其所謂眞に是なる者を見ると能はず約するに禮を以てせざれば則ち視聽言動、規矩準繩の外に出で、而して其是を失ふ故に君子博く文に學び萬理を會して以て此心の量を盡して而して又之を約するに禮を以てし一理を守りて以て身を修むるの要と爲す此の如くなれば則ち其眞を見極めて而して動くに必ず正を以てす亦以て道に背かざるべし故に朱子呂子約に答ふる書に云く大抵學を爲す只是れ博文約禮の兩端のみ博文の事は則ち講論思索、要に精詳を極め然る後に道理を見得し巨細精粗盡さる所なく容易に草略放過すべからず約禮の事は則ち但だ合に此の如く功を用うべきを知得し即ち便ち著實、此の如く手を下せば更に前を思ひ後を算へ計較商量するとなげ

んと蓋しこの博文約禮は聖門爲學の要法にして而して知行兼ね盡くし尙書の精、大學の格致誠正修、中庸の明善誠身、孟子の知言集義皆此れと旨を同ふする者なり學者其れ此に勉めざるべけんや

孔子の教授は此れを以て收局となす是れより更に孔子の學術に及ぼして夫子が仁を以て諸徳の根本と爲せしとを説き終にその純正哲學即ち周易繫辭傳を講せんと欲せしかども時間の許さるるを以て、果す能はず因て茲に謹んで筆を博文約禮に絶つと云ふ

明治二十五年十月下院

内田周平識

余の經を講ずる専ら程朱を宗とする者蓋し亦説あり夫れ四子一書、群聖の道の大成を集め集註一書、漢唐以來儒者傳説の大成を集む三代以上道を論じ學と治とを論ずるの言は孔孟の書に折衷して而して是非立ちどころに判す三代以下道を論じ學と治とを論ずるの言は程朱の書に折衷して而して醇疵立ちどころに見はる然れども程朱聖學を發明するの言極めて精粹なる者は尤も集註の中より備はるはなし後の儒者或は心學を言ひ或は漢學を主とし往

備 學 史

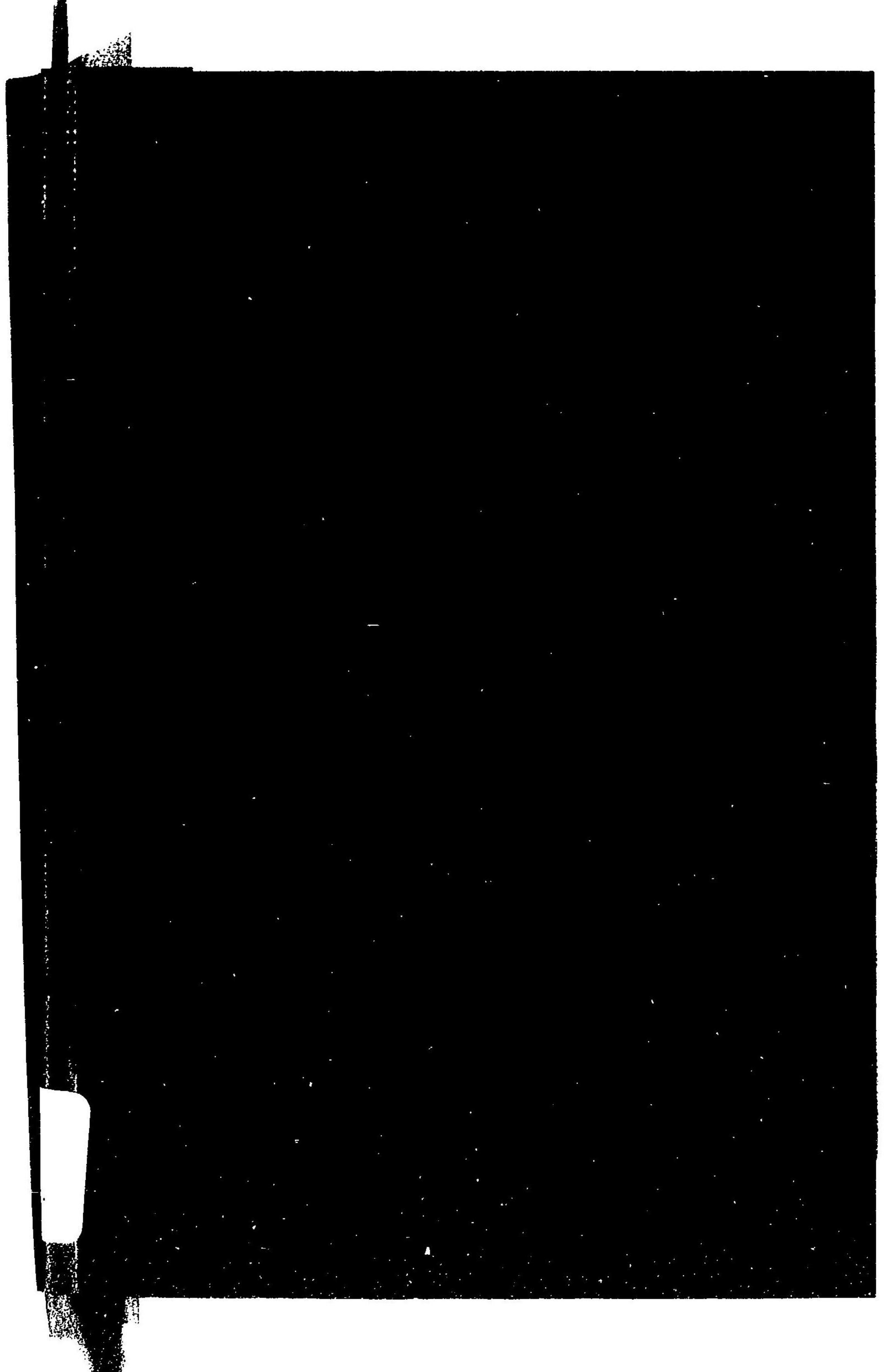
々好んで異論を爲す蓋し未だ嘗て其書を取りて而して之を深昧潜玩せざり
 しならん夫れ程朱の孔孟の經に於ける眞に深思力踐して而して心に得るあ
 りその之を言に見はす者眞に能く聖人の蘊を發揮し以て萬世に教ふ訓詁名
 物の小なる者間に疏略ありと雖とも然れとも亦僅かなり特にその工^〇夫^〇を補^〇
 明^〇し根^〇本^〇を推^〇究^〇するに至りては尤も學者に大功あり而るに後の學者その粗
 淺の見を以て肆に証讖を加ふその聖人の道に於て已に大に背きて而して馳
 するならずや朱子四書の註切要の處に於て毎に曰く學者宜致思焉曰く學者
 時々省察而無毫髮之間斷也曰く學者宜盡心焉曰く學者於此明辨而日省之曰
 く學者宜熟玩而深省之也曰く學者宜服膺而勿失也曰く學者可不勉哉曰く
 學者所當深察也曰く學者最宜潜玩と見るべし朱子一片の仁心處々に人の讀
 書の益を得んとを欲せしを吾れ他人の註に於て未だ此の如くに親切懇到な
 る者あるを見ざるなり

支那學儒學史終

哲三齋

14
228

天
國
南
館



14

228

哲学館講義録

支那学 (儒学史)

国立国会図書館

008244-000-9

14-228

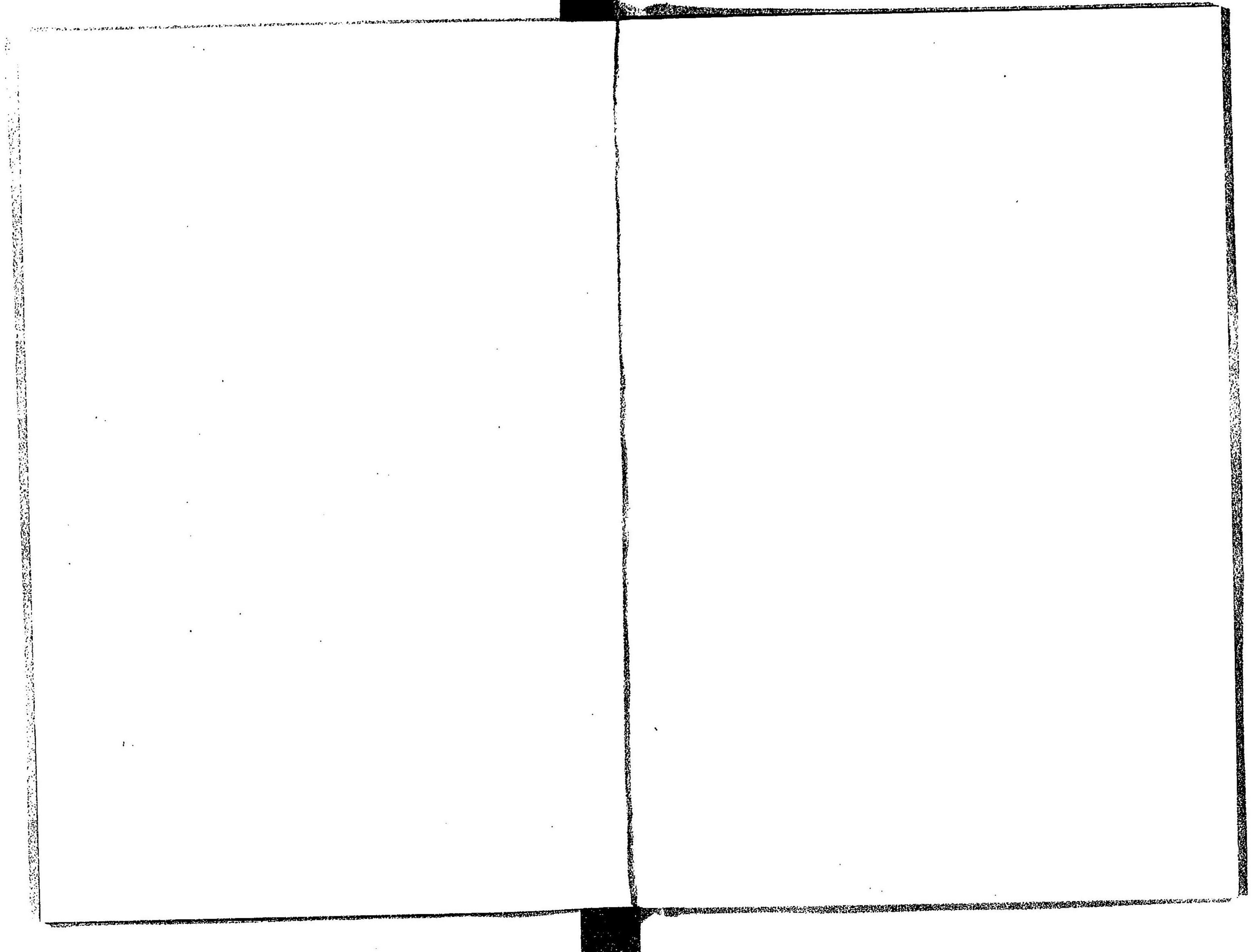
支那学 一儒学史一

内田 周平/述

M34

AAC-0125





14
228

67

五
高
科
講
義
錄

北
學
部
第
十
三
學
年
度

支
那
學
(儒學史)

内
田
周
平